

史 跡 福 山 城 II

昭和59年度発掘調査概要報告



1985. 3.

北海道松前町教育委員会

史 跡 福 山 城 II

昭和59年度発掘調査概要報告



1985. 3.

北海道松前町教育委員会

序

史跡福山城は、昭和50年度に史跡福山城保存管理計画が策定され、昭和52年度より今日まで国庫補助を受け、土地買上げ家屋移転補償、環境整備事業に係る石垣修理工事、発掘調査を継続して実施して参りました。

本年度は、松前藩主松前家墓所の修理事業（第2年次）と発掘調査850㎡を実施致しました。発掘調査の結果これまで不明確であった内堀石垣石が発見され、今後の石垣修復工事に向けての基礎資料を得ることができました。

本丸地内は、確たる建物跡は発見できませんでしたが、本丸御殿建物跡の解明と併せ、尚今後の課題となったところであります。

本丸地内には、更に福山館時代のから堀遺構が良好な状態で保存されていることがわかりました。福山館創建から福山城築城に至る約250年間の遺構の解明も、これからの課題になってくると考えられます。

大量の遺物の出土は、松前藩の繁栄の一端を如実に示すものであり、その資料の分析は、北海道近世史の解明の一助となるものでありましょう。

本年度も、この事業の推進にあたり、文化庁、北海道教育委員会をはじめ関係各機関、諸先生方に種々ご配慮を賜りました。心から、厚く御礼申し上げます。

昭和60年3月

松前町教育委員会

教育長 神 正 雄

例 言

1. 本書は、国庫補助による記念物保存修理（環境整備）事業に基づく国指定史跡福山城の昭和59年度発掘調査の概要報告である。

2. 本年度の発掘調査は、昭和59年9月17日から11月30日までの間、次の体制で実施した。

調査主体者 松前町教育委員会 教育長 神 正雄

発掘担当者 “ 久保 泰

調査参加者 松谷 太， 斉藤 久， 山本雅子， 佐々木加代子， 佐々木友美， 和田

俊彦， 森田潤一， 宮本康弘， 川原久子， 川村久子， 小平美恵子， 小
谷キセ子

3. 本書の執筆は久保，松谷があたり，文末に文責を記した。

5. 遺物の写真撮影は，鈴木正語氏にお願いした。

6. 遺物の実測図，トレースは佐々木悦子，工藤美幸があった。

7. 本年度の調査にあたっては，下記の機関および各氏よりご指導，ご協力をいただいた。（順
不同，敬称略）

文化庁記念物課，北海道教育委員会，北海道埋蔵文化財センター

仲野 浩， 鈴田由紀夫， 浅水武彦， 松崎水穂， 鈴木正語， 長沼孝， 前田正憲， 松前神社

8. 調査によって得られた資料・記録は，松前町教育委員会が保管する。

目 次

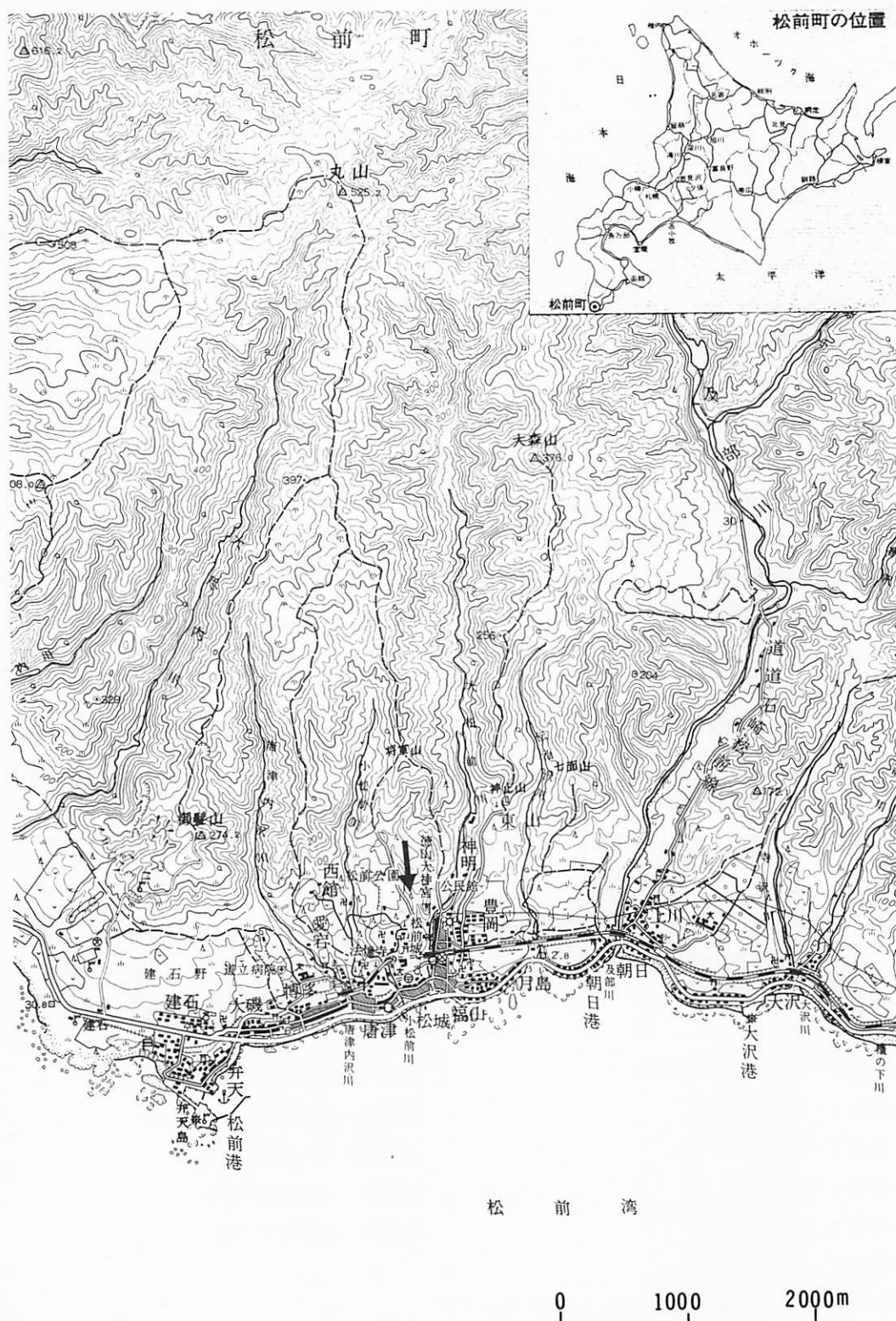
I 調査の概要	1	2) 空 壕	10
II 内堀の調査	4	3) 石列 B	13
1) 内堀西側	4	4) 排水路	14
2) 内堀東側	4	IV 出土遺物	15
III 本丸の調査	10	V まとめ	30
1) 内御役所建物跡地	10		

挿 図 目 次

第 1 図 遺跡位置図	iv	第11図 出土遺物 (4)	23
第 2 図 遺跡周辺の地形図	2	第12図 出土遺物 (5)	24
第 3 図 遺構配置図	3	第13図 出土遺物 (6)	25
第 4 図 内堀実測図	5	第14図 出土遺物 (7)	26
第 5 図 内堀東側正面図	7	第15図 出土遺物 (8)	27
第 6 図 縄張図との比較図	9	第16図 出土遺物 (9)	28
第 7 図 空壕実測図・土層図	11	第17図 出土遺物 (10)	29
第 8 図 出土遺物 (1)	20		
第 9 図 出土遺物 (2)	21	付 図 松前城縄張図	
第10図 出土遺物 (3)	22		

写 真 目 次

図版 1 調査開始前の状況	図版 9 出土遺物 (4)
図版 2 調査状況等	図版10 出土遺物 (5)
図版 3 石列 B 検出状況等	図版11 出土遺物 (6)
図版 4 内堀調査完了	図版12 出土遺物 (7)
図版 5 御影奉置所等	図版13 出土遺物 (8)
図版 6 出土遺物 (1)	図版14 出土遺物 (9)
図版 7 出土遺物 (2)	図版15 出土遺物 (10)
図版 8 出土遺物 (3)	



第1図 遺跡位置図

I 調査の概要

本年度の調査対象面積は、内堀部分と本丸部分を含め850㎡である。(第2図)調査は9月17日から開始したが、9月13日まで(4月10日着手の札前第1地点)国道228号線改良拡幅工事に伴う緊急発掘調査を実施してきたところであり、事前準備の不十分なまま行わざるを得なかった。本年度の調査目標は、大きく次の3点に要約できる。

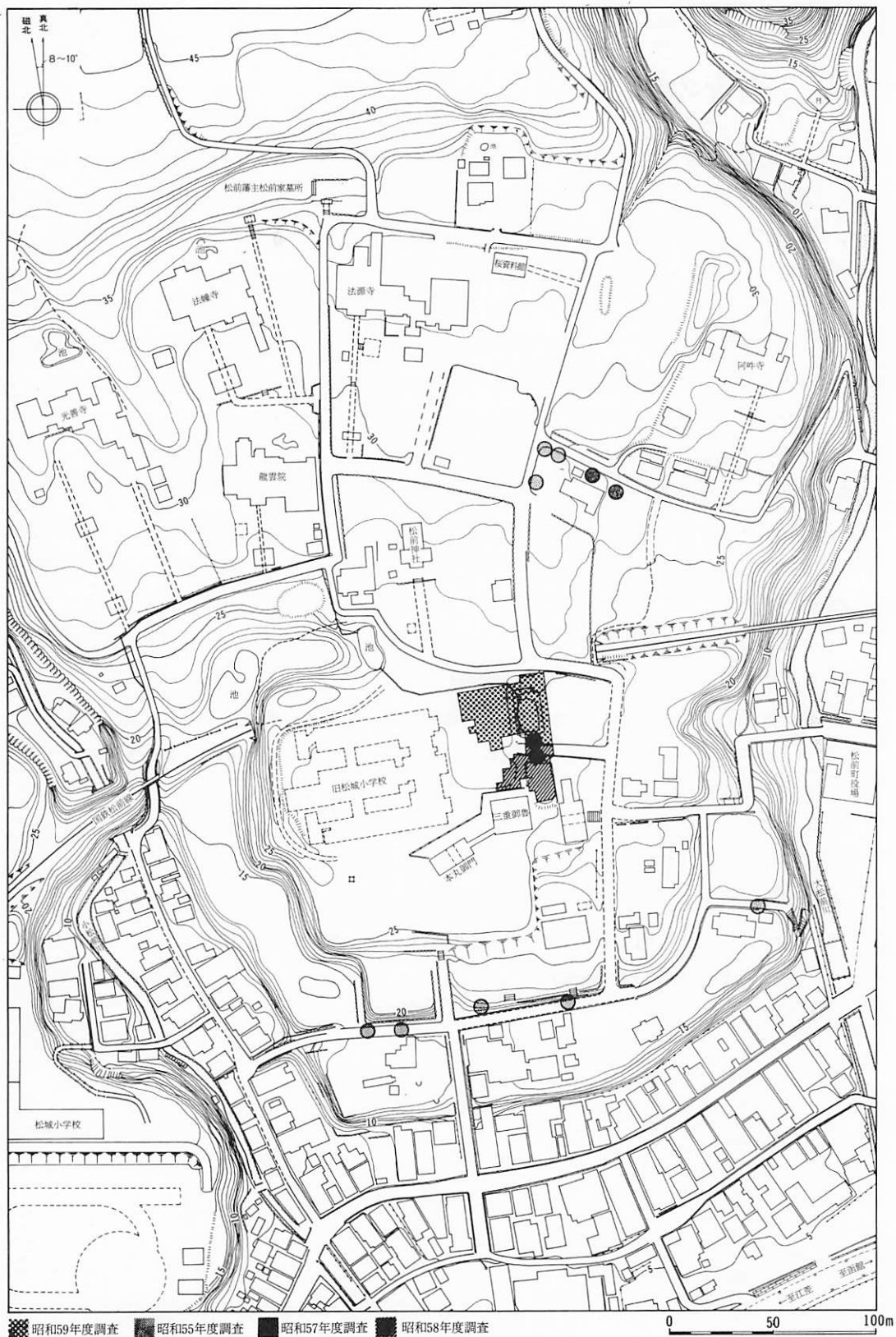
第1には、内堀の全容を把握すること。内堀の現況は、橋台部分までは石垣が抜き取られず、安政元年の築城以来ほぼその位置を留めていると考えている。しかし、橋台部から北側部分は、石は抜き去られてほとんどが埋め立てられ、一部旧松城小学校通学路、池として今日に至っている。したがって、石垣石の有無、内堀の全体規模の確認が目的である。

第2は、本丸地内に遺存すると思われる建物遺構の確認に務めること。前年度の調査では、旧堀上門とそれに付随する柵跡、御番所跡地を調査している。しかし、後世の攪乱が著しく、僅かに石列と砂利ブロック等が検出されたのみで、夫々の遺構の確たる位置は明らかにされていない。そうした経緯を踏まえ、本年度においては御番所と内御役所のあったと推定される地域を調査し、建物跡の確認に務めることとした。

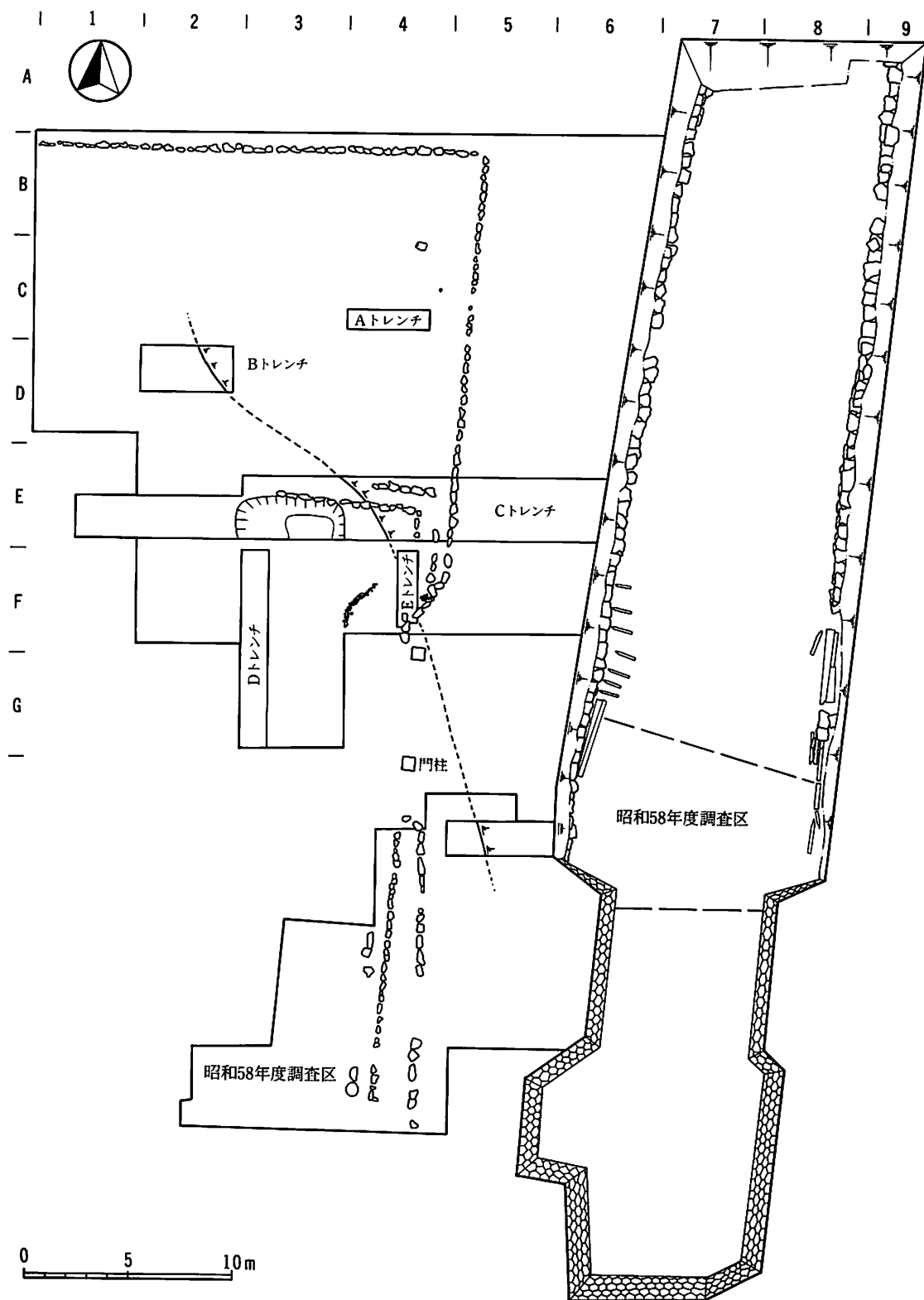
第3は、旧空壕の規模を明らかにすること。前年度調査で一部明らかにした福山館時代の旧空壕の位置、規模を更に明確にすること、以上の3点である。

調査方法は下記の手法によった。即ち、内堀地区には、前年度調査区の大半と未調査分は膨大な量の土砂が埋積していた。これらの土砂は、遺構に支障がない限り重機によって排土した。内堀内の調査であるため、ベルトコンベアー、揚水ポンプも常備作動し、進行させた。

調査終了後は、60年度より実施される予定である、環境整備(石垣修復)に備え、一部埋め戻し(土のう及び土砂)を行なった。本丸地域内には、磁北に合致させた5m×5mのグリットを設置、地表の面より土層変化毎に遺構の確認をし調査を進めた。遺物は層位毎にグリット一括して取り上げた。なお調査区域には、戦前から戦後にかけて植栽された桜と杉、椿などがあり、一部は伐採、他は史跡指定外へ移植した。



第2図 遺跡周辺の地形図



第3図 遺構配置図

II 内堀の調査

昭和58年度の調査では、橋受台部分（袖）の石垣の確認を行い、袖部分から北側の一部を調査している。その結果、内堀西側では、上位は既に抜かれていたが、北側へ伸びる下位の2段の石垣列（約6m）と角材、木杭が検出されている。東側は石垣石が、既に抜き去られていたものの石垣の位置を推定しうる裏込めの砂利と、胴木として使用されたとと思われる角材を検出している。本年度は、これらが果して築城当時の様態をそのまま伝えているのか否か、更に内堀の構築様式、全体的な規模の把握にある。説明にあたって、便宜上、内堀西側と東側部分に区別して述べていきたい。

1) 内堀西側

西側部分は、前年度明らかにされた部分6mを含め、橋受台袖部分から北側へ37.20m延長していることが確認された。石垣石は、前年度に検出した部分では下位2段が残存していたが、本年度調査では、大部分が最下位の1段分しか残存していないことが明らかにされた。石垣石の裏側には、拳大の玉砂利（裏込）がびっしりと入っており、築城当時の石垣と確認した。石垣最北部は、第2図でも分るとおり史跡内を通る生活路があり、石垣遺構調査を優先するとすれば、路線の変更問題がからんでくるため未調査である。これは、東側においても同様である。

検出された石垣石は、前年度と同様緑色凝灰岩（グリーントフ）であり、横幅50～80cm、高さ40～70cm、厚さ60～80cm大に粗割りされたものである。したがって、相接する石にはかなりの隙間があり、粗雑な石積み感は免れ得ない。しかも石垣石の最下面は一定しておらず、事前の石垣基礎部分の整地、地ならし作業は不十分だったようである。こうした現象の見られる理由は、石垣を置く地盤の不安定さにあったと思われる。即ち、検出石垣石の北側約半分は、直接固い地山（グリーントフの風化層・固い）に据えられている。これに対し南側半分は、石垣石の下に何らかの土工が行われている。つまり南側部は地盤が軟弱な泥粘土質であるため、角杭あるいは丸木杭を打ち、その上に石垣石を並べるか、あるいは直接地山の上に石垣を積み上げるにしても、石垣前面にかなり密に角（丸）杭が打ち込まれている。また、一部3.60m（12尺もの）の角材が2本石垣と杭の間から検出されている。これらの土工は後世のものではなく、多分に地盤を意識した築城当時の工法をそのまま伝えるものと推定される。また、石の接統面の不整合の状況、地山の土質から見て、湧水の中での土工ではなかったかと思料される。おそらく、下部2段程度は粗雑に積み上げられても、上位の石垣は切込はぎ工法によって整然と積み上げられたものであろう。

2) 内堀東側

東側部分は前年度調査では、石垣石が2個検出されたのみで、石垣が存在したと推定される位置から胴木と思われる4本の木材が検出されているだけであった。東側部分は西側部に比べ築城



22.80m

東側石垣正面図

EP A 25.30m

EPA

EP B'

EP B'

EP A'

EPA'

EPB

EP B 24.80m

昭和58年度調査区

A-8 | B-8
A-7 | B-7

C-8
C-7

D-8
D-7

E-8
E-7

F-8
F-7

G-8
G-7

H-8
H-7

I-8
I-7

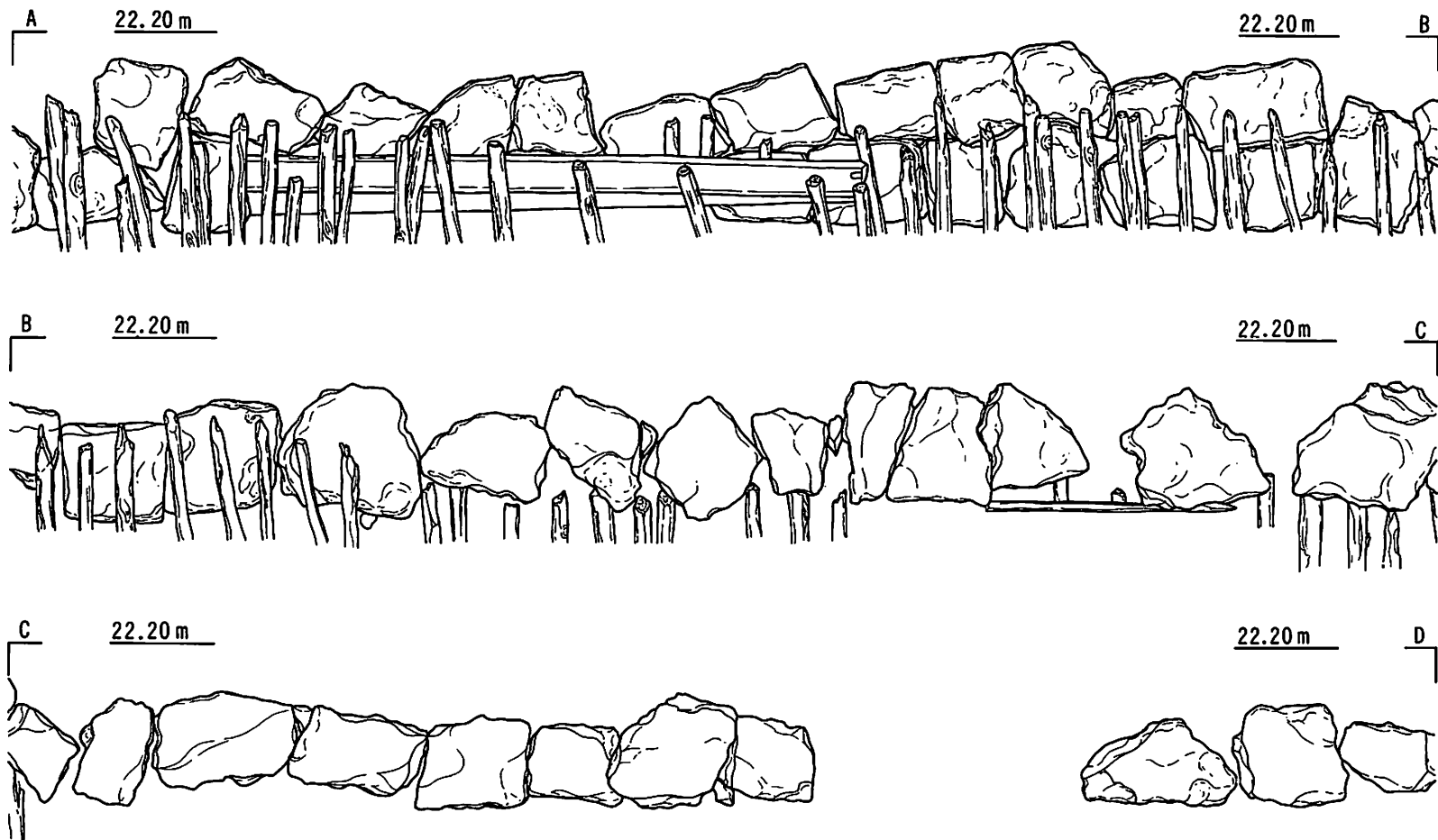
西側石垣正面図

0 1 2 3 4 5 10m

22.80m

第4図 内堀実測図

第5圖 内堀東側正面図

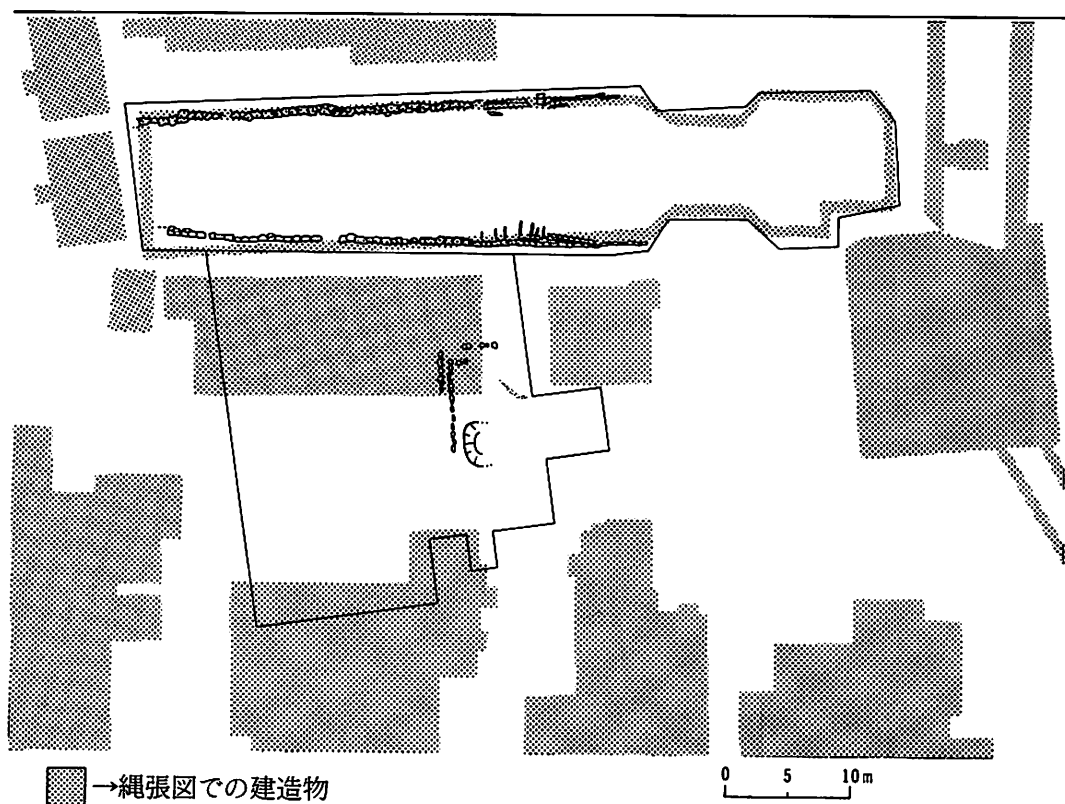
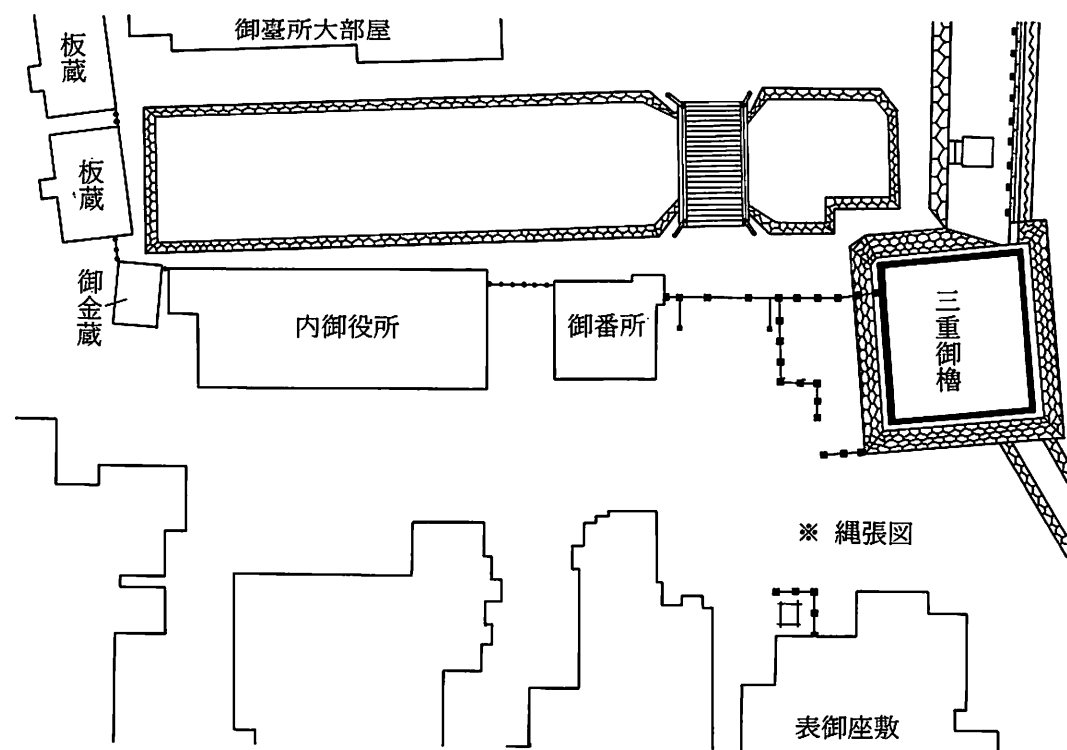


当時の石垣の高さが低いと推定されているから全石垣が抜き去られている可能性は強かったわけである。調査の結果、東側橋受台袖部分から約13mの区間は、ほぼ完全に近い状態で石垣石は抜き去られていることが判明した。この区間は、僅かに3個の石垣石が残ることと、石垣をその上にすえたとみられる胴木（角材）が残存していた。しかし、それ以降北側部分は、最下位石垣石がほぼ完全な状態で遺存している。部分的には2～3段遺存しており、そういう意味では西側部より遺存状態は良好である。内堀東側は、袖部分から北側へ39.20m延長していることを確認、用いられる石も西側と同様である。また、石垣石下部状況も大差はないが、西側では杭を多用していたのに対し、東側では胴木を用いるという差異が認められる。

以上、西側・東側部の下部石垣列を検出したわけであるが、今年度検出されたものが築城当時のものとみて大過あるまい。前年度調査では、残存する石垣石が果して築城当時のものか否かという疑問があったが、この問題は今年度の調査によって解決したことになる。前述のように、東側部は袖部分から39.20mまで検出したが、松前神社に残る縄張図を参考にすれば、ほぼ末端に近い位置まで検出し得たことになり、西側未調査部分には少なくとも2m強の石垣列が埋もれていることになる。

今回の調査では、石垣の高さ（天端）を把握することも目的の一つであった。東側部分は、現存している橋受台部分の天端端までは石垣が積み上げられていたと考えるのが自然の見方であろう。これに対し西側部分では、果してどの高さまで積み上げられていたかを確認することも目的であった。しかし、今回の調査では、西側部分は後世の崩落によって、全くその痕跡を把握するには至っていない。未調査区である内堀最北端部を調査することによって、あるいはその可能性もあるかもしれないがおそらく低いであろう。第2次大戦中の国鉄松前線工事（オープンカット工法によって内堀北側部近くにトンネルがつくられている）が、どの程度の規模で行われたか知る由もないが、おそらく残存部は、この工事によってかなりの攪乱を受けているものと覚悟しなければなるまい。したがって、今後の調査によったとしても、西側の天端を決めるまでには至るまい。また、松前神社所蔵にかかる縄張図にもその高さの記載は見られない。

しかし、一つの手だてとして、本丸内の現地形レベルと、内堀と内御役所との位置関係は参考になろう。縄張図によって推定される内堀端と内御役所建物との間隔は1～2m弱（1間以内）程度の広さである。したがって、内堀の天端そのものが現地表面（旧松城小学校々庭レベル）に近いものでなければ、内御役所の建物そのものの維持は困難であろうと思われる。石垣修復にあたっては、こうした観点から吟味することが必要である。



第6図 縄張図との比較図

III 本丸の調査

本丸地区は実調査面積699㎡を行ない、調査目的は内御役所建物跡の確認と、前年度明らかにした空壕の規模確認に務めることを主眼とした。このほか、前年度に検出していた石列Bの確認と性格づけ、旧松城小学校関係者によれば校庭内に桧木材による導水管(排水路?)が存在したとされ、その位置確認に務めることも目的に加えた。以下、順を追って記載していくものとする。

1) 内御役所建物跡地

内御役所は内堀のすぐ西側に存在した建物で、縄張図その他に規模の細かい記載はないが、松前神社の縄張図によれば、おおよそ南北14間(西側は13間)、東西5間強の建物として示されている。今回設定した調査区には、建物北側部が欠けるものの、ほぼ全容把握が期待できる筈であった。現状は、黒松・梅の古木が植栽され、つい最近まで旧松城小学校の遊具施設(ブランコ、シーソー、回転塔、雲梯、ジャングルジム)が置かれていた場所である。しかも、終戦直後までは明治34年竣工の御影奉置所(松前町江良産の滑石造り、写真図版参照)が建設されていた場所でもある。

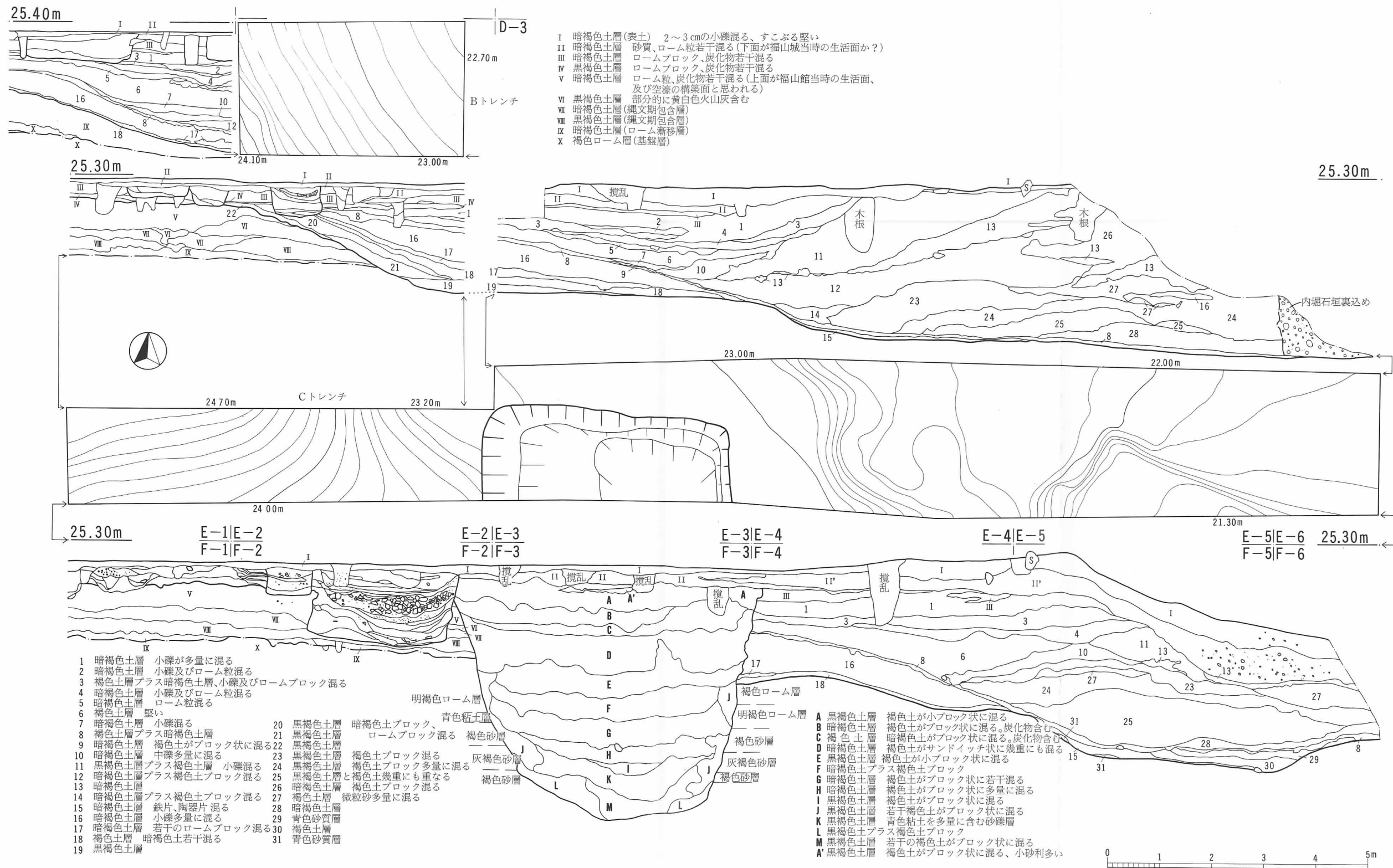
調査は、戦後になって敷散されたとみられる石炭灰層や碎石粉の層(両方で5～10cm)を除去、これより下部を戦前から幕末期の生活面と想定して調査を進めた。しかし、検出されたものは、奉置所(奉安殿)の基礎(深さ約1mの玉砂利層)と石列のみであった。石列については後述する。縄張図がある程度信頼できるものとすれば、ほぼ建物東半分は、内堀法面の崩壊により建物基礎部分が流出した可能性が強い。更に西半分については、明治7・8年代の福山城取り壊しの際以降奉置所設置に至る間に、礎石まで抜き去られたと考えられる。

今回の調査では、礎石の抜き取り痕そのものも全く検出されていない。この原因として、礎石の痕跡を留めぬほど攪乱を受けているものなのか、建物の基盤自体が周囲より若干高く築かれ、それらの全てが後世削平されたものか、現時点では解明できない。

2) 空 壕

空壕(旧福山館時代のから堀)は、前年度の調査で一部その存在が確認されていたものである。前年度の調査では、長さ4.5m、幅1.5mのトレンチを設定し、幅は不明であるが現地表より約3mの深さをもつ空壕のあることが確められていた。本年度では、この空壕の位置、規模を把握することを主眼としたが、調査日程の都合上2本のトレンチを入れるのに留めた。即ち、第3図で示したBトレンチ、Cトレンチがそれに相当する。トレンチ内の調査は、一部ベルトコンベアを使用したほかは人力により行なった。

調査の結果は、Cトレンチを主体に見ていくと、福山館時代の生活面は現地表下約40～50cmの深さに遺存していることが分った。それより下部は、縄文時代後期の遺物包含層となって地山面に至っている。空壕の掘り込みは、CトレンチではE-2区からE-3区にかけて、Bトレンチ



第7図 空壕実測図・土層図

ではD-2区に一部掘り込みが認められる。この2本のトレンチにより、空壕の方向は北西―南東方向に延びていることが判明したのである。これを延長していくと、前年度調査した空壕の方向と一致することになる。しかし、この方向を直線で表現したとするならば、「松前城之図」(梅木通徳氏寄贈、松前城資料館、年代不詳)、「松前自沖口至奉行所図」(国立公文書館蔵、幕府直轄時代、文化4～文政4年)に表われた姿、また享保2(1717)年の幕府巡見使一行の編さんによる「松前蝦夷記」(松前蝦夷地覚書)の記事

堀 西北江引廻シから堀 西之方六十間斗水少々有之

東之方柵内通廿間斗から堀有、堀幅何茂拾間方内のよし

などを参照してみると合致しない。絵図面等では、現内堀にほぼ平行する方向に示されているのである。勿論2本のトレンチだけでは今回想定した方向が正しいのかどうか、あるいは鉤の手に曲がったりカーブしているとすれば問題は全く別のところにあることになる。したがって、空壕の方向については、より多くのトレンチを入れるなり広範囲に調査するなりの手順が必要であり、現時点では保留としておきたい。

空壕の構造については、文献記載のとおり空壕である。ただし最下部には、若干の水が溜っていたらしい。それは、最下層より当時生えていた植物が腐りきらずに緑色を呈して遺存していたし、木製品の遺存状態も良好であったことなどから言ってよいだろう。

空壕の断面形状は、いわゆる箱葉研の形態ではなく、2段になっていることが分った。また、壕の深さは、最下部で福山館当時の生活面より約3mであることが判明した。壕の外側に土塁を築くならば深度は更に大きくなるわけであるが、土塁の有無は攪乱が著しく明らかにし得なかった。

また、空壕の幅については、文献では10間以内(約18m)ということになるが、少なくともCトレンチにおける土層観察の結果では、20m以上(約22mくらい)あることになる。たまたまトレンチがそういう区域に遭遇したのか、崩落によって広がったものか今後の検討課題となろう。空壕の埋積土は、土層注記に示してあるが、主として内堀の掘り上げ土によって急激に埋め込まれているらしい。これは、埋積土中にはほとんど遺物を包含しておらず断言できよう。

さて、Cトレンチの中から非常に深いピットが検出されている。最下部までは現地表から約5mあるもので、危険防止と調査日程の都合で全容を明らかにし得えなかったものである。

土層観察の結果では、明らかに空壕よりは新しいし、少なくとも明治33年以降のものではない。内部から遺物はほとんど出土していないし、埋土の状況も自然に埋まった様子は観察できない。単なるゴミ捨て用の穴でもないし、便所としては深すぎ、別の目的があったのであろう。全容を把握していない段階で断定は控えるが、途中で掘り止めた井戸の跡の可能性が強いとしておきたい。

3) 石 列 B

前年度の調査では2つの石列が検出されていた。このうち石列Aと呼称したものは天守(三重櫓)台付近から現内堀に沿って北へ延び、旧校舎敷地をとり囲むように巡るものである。既に昨

年の時点で、福山城遺構とは無関係のものと理解しておいた。これに対し石列Bは、若干深い位置からほぼ石列Aに平行するように検出され、この性格決定は保留としてきたものである。

今年度の調査の結果、石列Bは次のことより明治以降のものと判断する。即ち、完全に空壕埋立て地の上にあり、福山館時代のものではない。Cトレンチ上で鉤の手に西側へ折れ、今年の調査区内では通路状に二重になっていることが分った。縄張図によって想定される建物位置には不自然な形で重複し、少くとも建物に伴う石列ではない。また、御番所、内御役所にしても空壕を埋めた跡地に建てられているし、埋立てから建築に至る間にこのような石を置く必要がない。建物土台と考えても、必ずそれに対応する形で礎石の抜き取り痕なり何かある筈であるが一切認められていない。したがって、通路状になっていることから、奉置所へ通ずる路と解釈するのが理解しやすいことになる。以上により、明治33年前後の作工物と判断する。

4) 排水路

旧松城小学校関係者の談によれば、昭和30年代ころ小学校門柱から北側数mくらいの場所に、桧木のかかなり厚い板（一寸位か）による1尺四方形の排水路（?）が、小学校から内堀へ向けてほぼ直線的に埋設されていたといわれる。この話を聞き、あるいは本丸御殿建物から内堀へ通ずる生活排水路の可能性もあり、2本のトレンチ（D・Eトレンチ）を設定した。しかし、両トレンチ内の深さ約1mの位置から素焼の土管が検出されたのみであった。この種の土管は、径15～18cm、長さ90cm程のもので、昭和30年代ころまで北海道では広く煙筒として利用されていたものである。おそらく、木製の排水路（?）の替りに土管が埋設されたものと思われる。調査は位置確認の上中止したが、木製の排水路の性格づけは今後の課題となり、旧松城小学校舎跡地の調査によって結論が得られるであろう。

（久保）

IV 出土遺物

今年度の調査で得られた遺物資料は、昭和58年度の資料と共に多量かつ豊富である。遺物は内堀より出土したものが大半であり、御番所及び内御役所が存在したと推定される台地からは、ほとんど出土していない。また、昭和58年度の調査に引き続き福山館（慶長5年）期の空壕のトレンチ調査によって若干量の遺物が出土している。内堀より出土した遺物は、福山城（安政元年築）当時のものが主体であるが、明治初期～近代に至るまでの遺物も相当量混入している。内堀がいに廃棄（投棄）の恰好の場所となっていたかが看取される。

したがって、ここでは器種ごとに分類し、昭和58年度の調査によって得られた資料も若干加えて説明する。

遺物は大きく分けて陶磁器類、瓦、鉄製品類、銅製品類、木製品類等が出土している。この中で瓦が最も多く、次いで陶磁器類が多く、この2種が大半である。したがって遺物の記述は陶磁器類が多くなることを断っておきたい。

陶磁器類（第8図～第14図）

遺物の中でも瓦に次いで多く出土しており、磁器、炝器、陶器、土器に大別される。

1) 磁器碗類（第8図～第9図）

碗類は飯茶碗、湯呑み茶碗、猪口に大別される。

碗類は1点より図示していないが、口径10～11cm、器高6cm前後、高台径4～5cm程のものを飯茶碗とした。

1は口縁部が若干端反りする器形で、外面に淡青色の呉須によりにぎやかな草花文を絵付けし、内面の口縁部に雷文を、見込みには簡略化された松竹梅が描かれる。

2～7は蓋であるが、飯茶碗と対になるもので、口径9cm前後、器高3cm程のものである。

2、3は口縁部は端反りし、5～7は丸腰である。2、3は外面に飯茶碗同様、にぎやかな草花文絵付けし、2は内面にも外面同様の文様が描かれ、高台内部には圓の銘が入る。

3、4は口縁部に雷文と同心円文が描かれ、見込みには松竹梅が描かれる。

5は見込みに「青化年製」の銘が入る。

6、7については印版によるものでコバルトが強いことより、明治初期のものであろう。

8～13は湯呑み茶碗で、口径8～9cm、器高3.5～5cm、高台径3～4cm程のものである。口縁部はすべて端反りで10のように極端な例もある。高台部の畳付けが細いもの（8～10）幅のあるもの（11、12）また、眼鏡底のもの（10）がある。

8は呉須により4ヶ所に篆字が書かれ、見込みには雁金が描かれるものである。

9は外面に鳥文（サギ?）を、見込みには「寿」が描かれる。10は印版、12はコバルトが強く、明治のものであろう。

13、14は猪口である。口径6～8cm、器高5cm前後、高台径3～4cm程のもので、いわゆる煎茶器、酒器の類で湯呑み茶碗よりも一回り小型である。13は漢詩が外周し、高台内面に「松風」

銘が入る。14は外面の口縁部に雷文、松竹梅と鶴の吉祥文を描きにぎやかである。

2) 磁器皿類 (第9図～第10図)

皿類は小皿、中皿、大皿に大別される。この他、図示していないが燈明皿の小破片もみうけられる。15はいわゆる紅皿の類であろう。16、17は型おこしで、16は輪花形、17は角形である。

16は口縁部は丸腰で、見込みに菊花文が浮彫りに入り、17は5つに区画され、中央に梅花文が配される。共に内面にのみ淡青色の呉須が付けられる。18は空壕内出土のもので唯一の伊万里焼である。輪花形で口縁部は若干端反りである。内面には富士と帆掛け船が描かれ、釉は比較的厚くかかっている。19は内面に梅花文、同心円文を描き、見込みに略図化された松竹梅が入る。20は輪花形で口縁部が丸腰で内面に鳥文（鶴?）。21は口縁部が直線的で内面に松竹梅が描かれる。22は輪花形で口縁部は端反りである。コバルトが強く、線も堅いことにより新しいものであろう。底部はいわゆる眼鏡底である。23は大型の角皿である。

3) 磁器鉢類 (第10図24)

鉢は1点より図示していないが、24は八角形の大型の浅鉢である。口縁は外反するが、口端部は内屈する。内面を9つに区画し、格子文、草花文などが描かれる。

4) 磁器その他 (第11図25～28)

25は印版の急須。27は取手を欠くが灰釉の油注である。片口部は上向きで短い平底である。27、28は煙蓆盆で現在でいう灰皿である。形態的には同様といえる。共に内面底部は露胎である。その他、図示していないが水滴と思われる破片も出土している。

5) 炉器行平類 (第11図29・30)

29は鉄釉、30は緑釉である。29は口径18.8cm、器高5.1cm、高台径5.8cmの蓋で、同心円で区画された中に飛鉋がみられる。30は口径19.4cm、器高10.2cm、底径7.0cmで片口と取手がつく。片口は短く上向きで、取手は中空の型抜きで「寿」が付される。底は若干上げ底である。

6) 炆器その他 (第12図31・32)

31、32は土瓶の蓋である。本体も出土しているが小破片のみで復元されたものはないが、底部は上げ底気味で、黄、緑、茶などで絵付けされる。

7) 陶器徳利 (第12図34～36)

いわゆる貧乏徳利である。34、35の外面は白のナマコ釉、内面は鉄釉が施される。36は外面も鉄釉が施される。

8) 陶器その他 (第12図33、37)

33は万古の急須、37は片口の甕?と思われる。内外面とも鉄釉が施される。

9) 陶器擂鉢 (第13図、第14図)

38～45は空壕のトレンチ調査の際に出土したもの、46～48は内堀内部より出土したもので、楕円条線の線間に大きな差がある。すなわち、前者は間隔が広く、後者は狭く密である。口縁部は平縁のもの（40、44）、玉縁のもの（41～43、45）、があり、玉縁のものは凸帯に1～2条の条線が施される。38～45については福山館当時に使用されていたもの、47～49については幕末期のものと思われる。42～43については備前系のものと推定される。38、41は口縁部が平縁で、内面

に1条9線の櫛描条線を施す。平底で素地は灰褐色で茶褐色の釉が掛けられる。39は胴下半部から底部にかけての資料で無釉である。内面に1条8線の櫛描条線を施し、糸切り底で、底部は若干上げ底で素地は橙褐色である。42～43は素地は赤褐色で茶褐色の釉が掛かる。口縁部の凸帯に特徴のあるもので、口縁部内面にも条線が施され櫛描条線は1条9線(43)、1条10線(42)である。3点とも条間は広い。45は無釉で素地は灰白色である。珠洲系のものかもしれない。46は無釉で素地は赤褐色である。完形品で口縁部に折り曲げの片口が1カ所ある。内面は密に櫛描条線が施され、見込みには同一施文具により、1条9線の櫛目が風車様に6方向に施される。47～49は高台のつくりが類似するもので、47は灰褐色の素地で内・外面ともに赤褐色の釉が、43、44はにぶい赤褐色の素地で内・外面に茶褐色の釉が掛けられ、3点とも櫛描条線が密に施される。

10) 土器類(第14図)

その他、土器質焔炉の小破片も数片みられる。50～52は瓦止めと推定されるが使用方法等の詳細については不明である。(松谷)

金属製品

内堀内からは建築廃材とともに若干の釘類などが出土しているが割愛しておく。ここでは刀剣について記しておく。

1) 刀(第16図)

内堀最下部から刀が一振り出土している。鞘・鐔などが装着された状態であり、投棄されたものと思われる。層位的に見て、明治33年以前に投棄されたものであろう。長期間水漬けの状態に置かれていたため、木質部を除き保存状態は不良である。

刀身 長さ73cm、反り2.3cmで江戸時代の刀としては長大な部類に入る方であろう。遺存状態は極めて悪く、刃紋等は分らない。刃先の身幅等から推して、かなり研減りしているものと見られる。茎には鐔目・銘はない。目釘孔一つ。

鐔 錆が著しく刀身から離すことができない。鉄地で、富士山と思われる鋤出高彫がなされている。山頂部の白雪は銅による色絵がさなされ、裏面にも一部鳥かと思われる鋤出高彫があるが、よく分らない。厚さ推定4mm前後。

縁頭 銅製。ボタンの花をあしらった意匠で、花、蕾の部分には渡金がなされている。

鞘・柄 欠損。鞘には梨子地肌の漆の皮膜が残っている。柄は白木の状態で、装飾等は不明である。

2) 短刀(第16図)

本丸部Cトレンチ内上層出土。錆が著しく保存状態不良。長さ14.5cm。茎には木質が付着している。

瓦(第15図)

前年度に引きつづき本年度も、内堀内からは多量の瓦が出土している。瓦は長征や家屋の廃材とともに出土しており、火災や家屋の解体とともに廃棄されたものであろう。出土するものは軒平瓦、平瓦が主で、他のものは極めて少ない。主なものは図示しておいた。瓦は大きく2種類あり、1～5はいわゆる黒瓦や、巴文をもつ軒平瓦となるものである。1には㊦の記号が見え、瓦

職人の屋号を表わすものかと思われる。これらの瓦は、現在町内の各寺院、寺院周辺、武家屋敷跡地に残るものと同様のもので、ほぼ江戸時代のものとみられる。

6は褐色の釉のかかる軒平瓦で、瓦当に唐草文が見える。これと同種の釉の施された鬼瓦が旧松城小学校解体跡地より採集されているので、参考までに銘文を記しておく。

明治九子三月

石見国那賀郡

濱田縣下

生湯住 瓦師 埤 勝蔵

木製品

内堀内からは前述のように多量の木材、長桁、生活用品などが出土しているが、時期が明確ではない。したがって、ここでは主として空壕の最下層から出土したものを扱っておく。

1) 漆器(第17図1)

内堀最下部の出土である。外面黒漆、内面朱漆仕立てである。厚さ、湾曲、つまみの状況から見て平物の蓋であろう。

2) 樽桶(第17図2, 3, 7~11)

樽の側板、底板である。2, 3は形状から1斗樽。7~9は2斗樽の底板であろう。10, 11は桶の側板と思われる。

3) 棒状木製品(第17図4~6)

断面が略長方形を呈するもの。楕円形となり先端を尖らしているものがある。いずれも破損しており用途不明。材質分析はしていないが、針葉樹と思われる。(久保)

遺物について

本年度の調査によって得られた資料は、福山館期の所産と思われるものが若干量と、福山城当時の所産と思われるもの(大部分)、及び、明治以降のものが出土している。ほとんどのものが福山城当時のもので、主に文化文政期~幕末にかけてのものである。福山館期のものとしては、伊万里焼の小皿(第9図18)、及び、陶器擂鉢(第13図38~45)がある。擂鉢については、肥前系、備前系、越前系のものと思われる。

調査の主眼となっている福山城構築時、経営時に使用されていたものは、瓦類が完形品は少ないものの多量に得られた。色調はにぶい灰褐色を呈し、軒には巴文が入るものである。又、「今」「公」等の記号がみられ、生産者が認められるものもある。明治以降の瓦との大きな違いは、素地の色調にある。明治以降の瓦の代表例として、旧松城小学校の鬼瓦があり、これは赤茶褐色を呈するもので、福山城構築の際に使用された瓦とは明確に判別されるものである。

陶磁器類については、器種、数量とも多量であるが、ほとんどが内堀内部から出土したもので後世の遺物も多数混入している。福山城当時に使用されていたものは碗類、皿類、鉢類等の日用雑器が大部分を占める。産地は美濃、瀬戸それもおそらく多治見近辺の窯で焼かれたものが多いようで、肥前系のものは見あたらない。これは、福山館期のものと大きな違いである。ただし、土瓶類については益子焼と考えられるし、その他、天保以後、東北地方においても磁器の生産が

さかんに行なわれていることより、宮城県切込や、山形県平清水、福島県相馬等で焼かれた製品も入りこんでいる可能性もあろうかと思われるが、現段階ではそれらを抽出できない。

本調査で得られた資料は主に「白老仙台藩陣屋」「松前藩戸切地陣屋」の資料と多くの類似点がある。特に「松前藩戸切地陣屋」のものは、ほとんど同じと言っても過言ではない。これは当然の結果といえそれまでであるが。

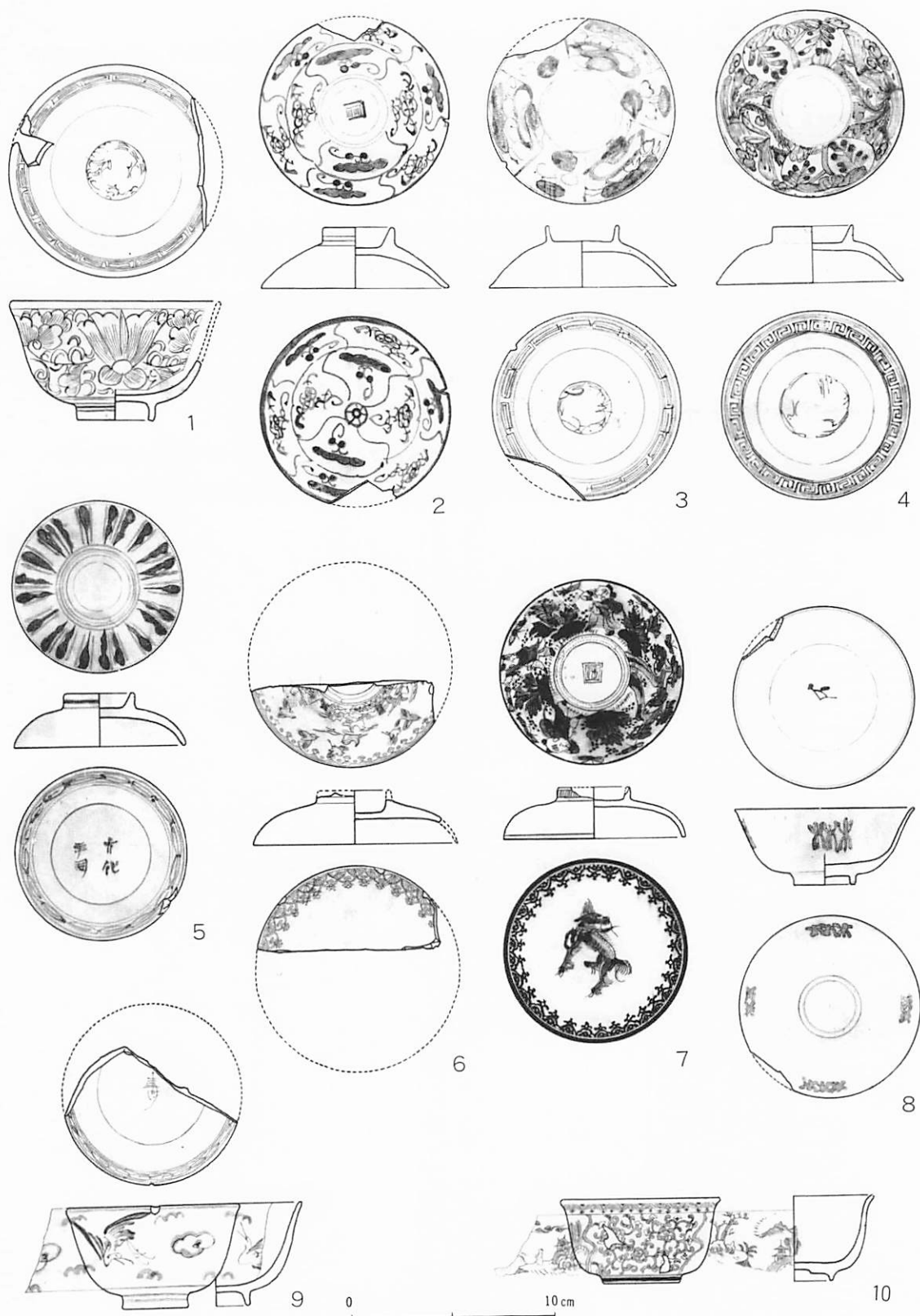
最近、前述のような陣屋跡の調査も開始され、とかく、立遅れがちであった北海道の近世の遺物も含め歴史叙述も具体性を帯びてきてはいるものの、現段階ではまだ不明な点多々ある。

遺物においては、資料の蓄積をまって産地同定、流通経路等を明らかにしていく必要性が、感じられる。

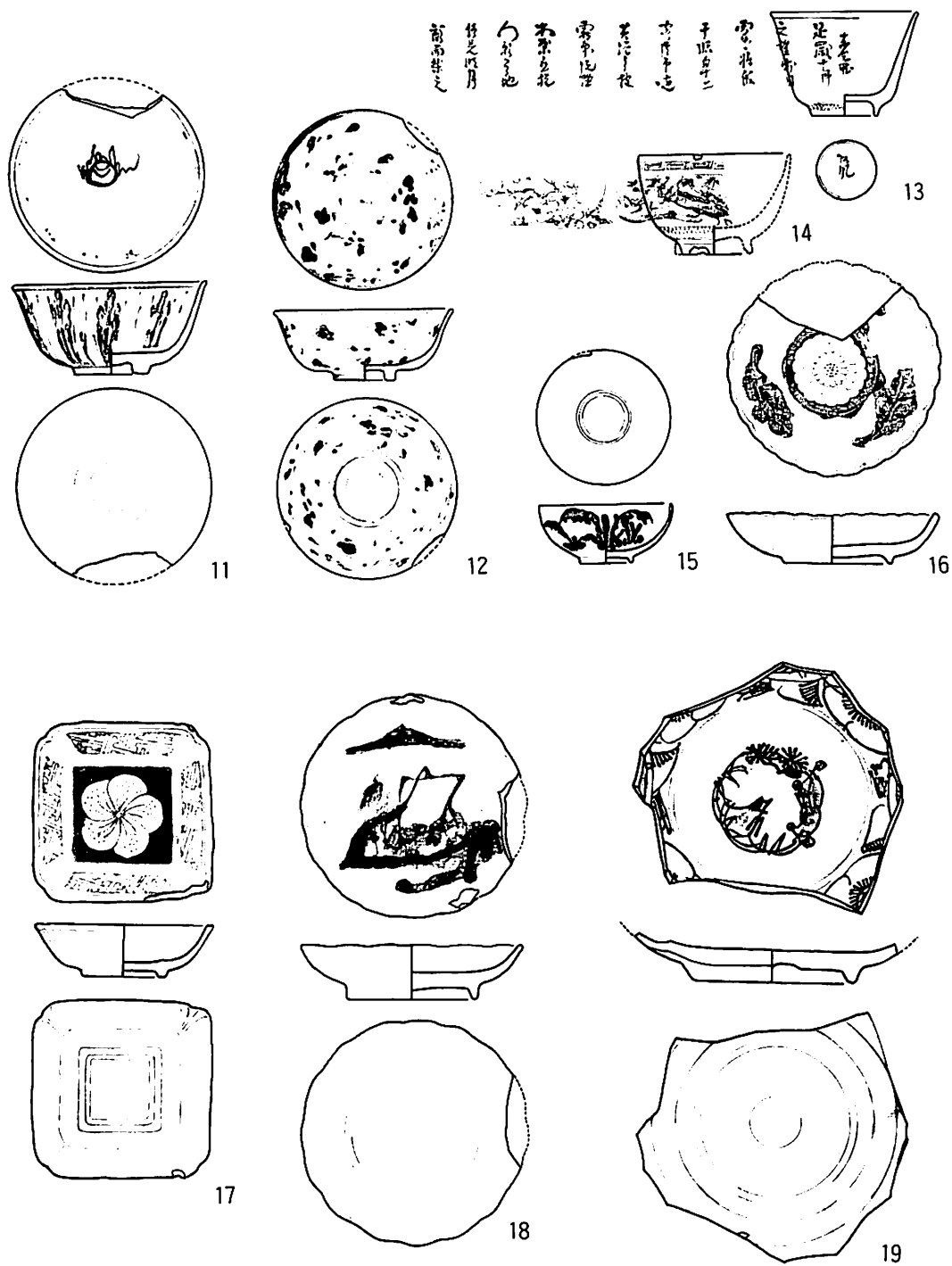
松前町においても福山城の調査、整備事業が継続に行なわれる予定であることにより、近世～近代の資料分析等が期待されるものである。

陶磁器類については、道埋文センター長沼孝氏に御教授していただき、北九州陶磁博物館鈴木由紀夫氏には有田焼、伊万里焼等の肥前系の資料も実見させていただき御指導賜った。記して深謝申し上げます。

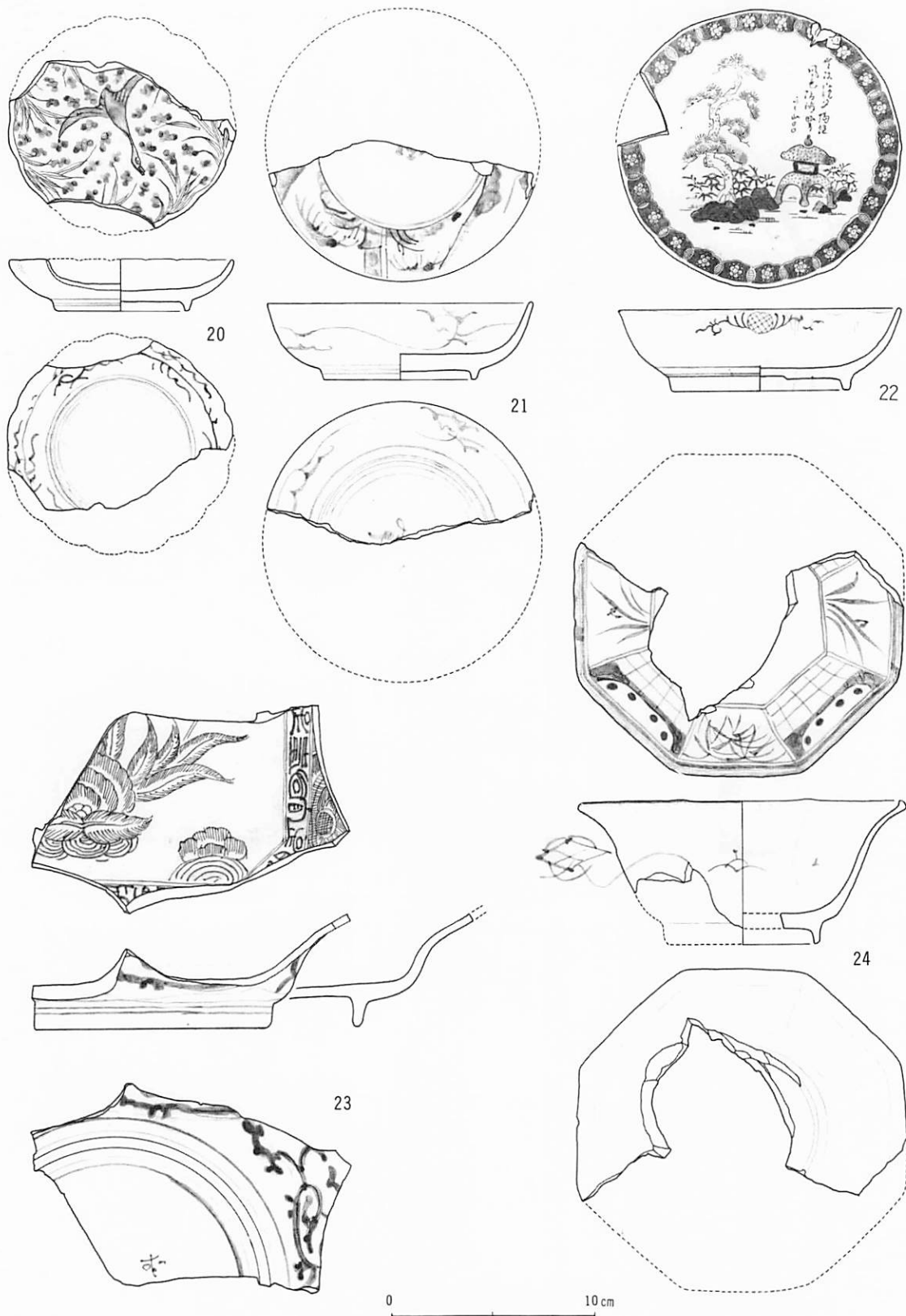
(松 谷)



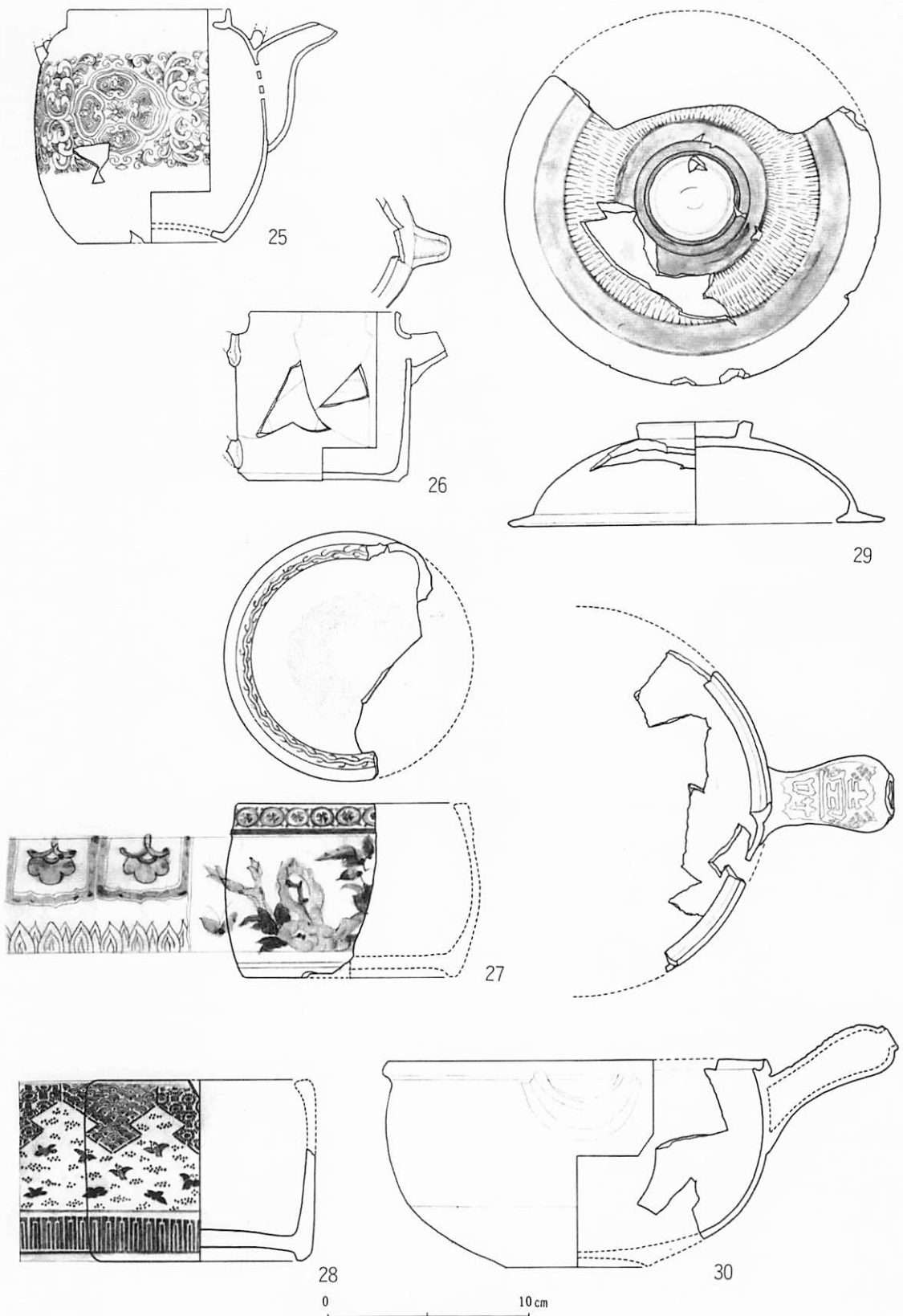
第8図 出土遺物 (1)



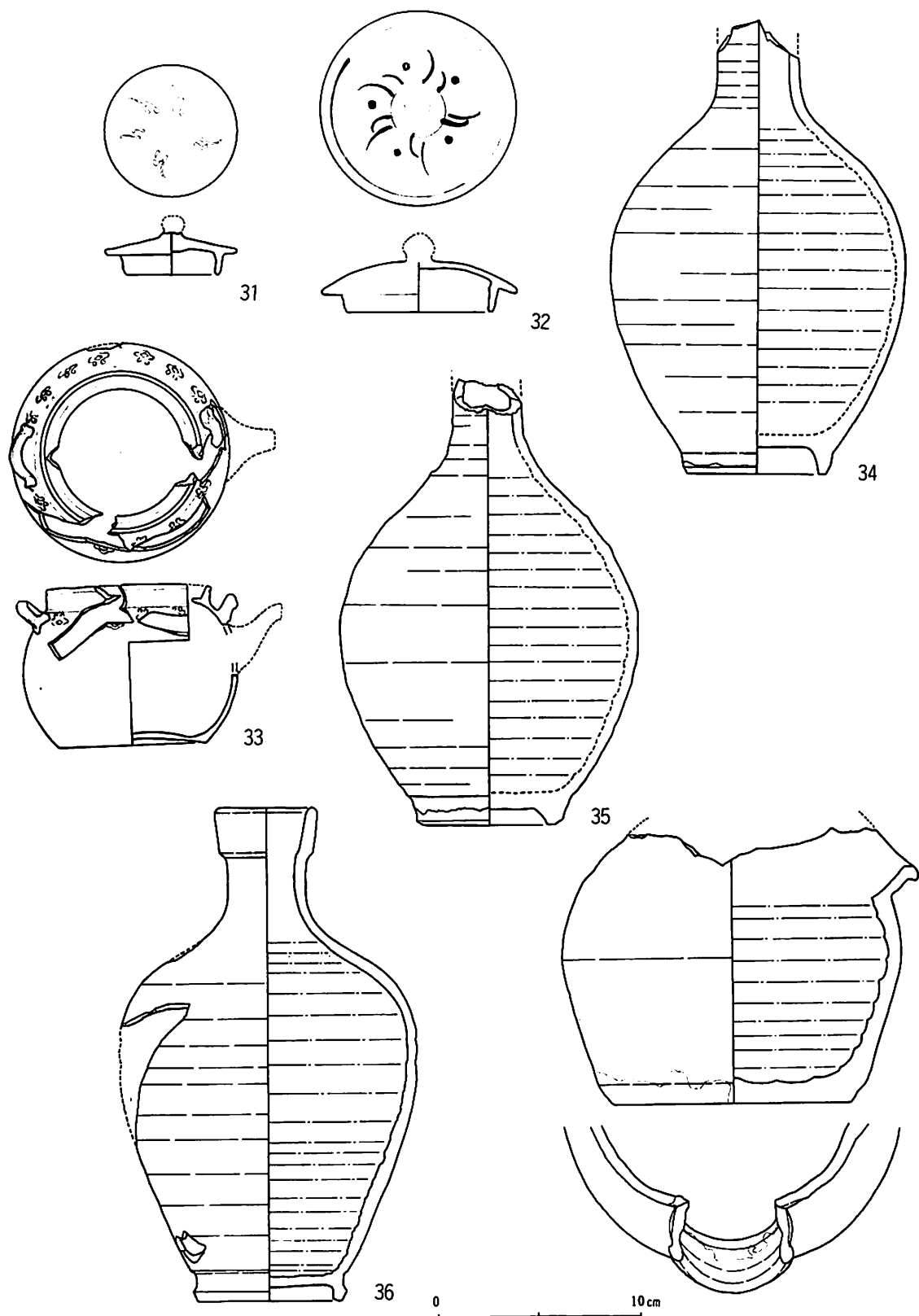
第9圖 出土遺物 (2)



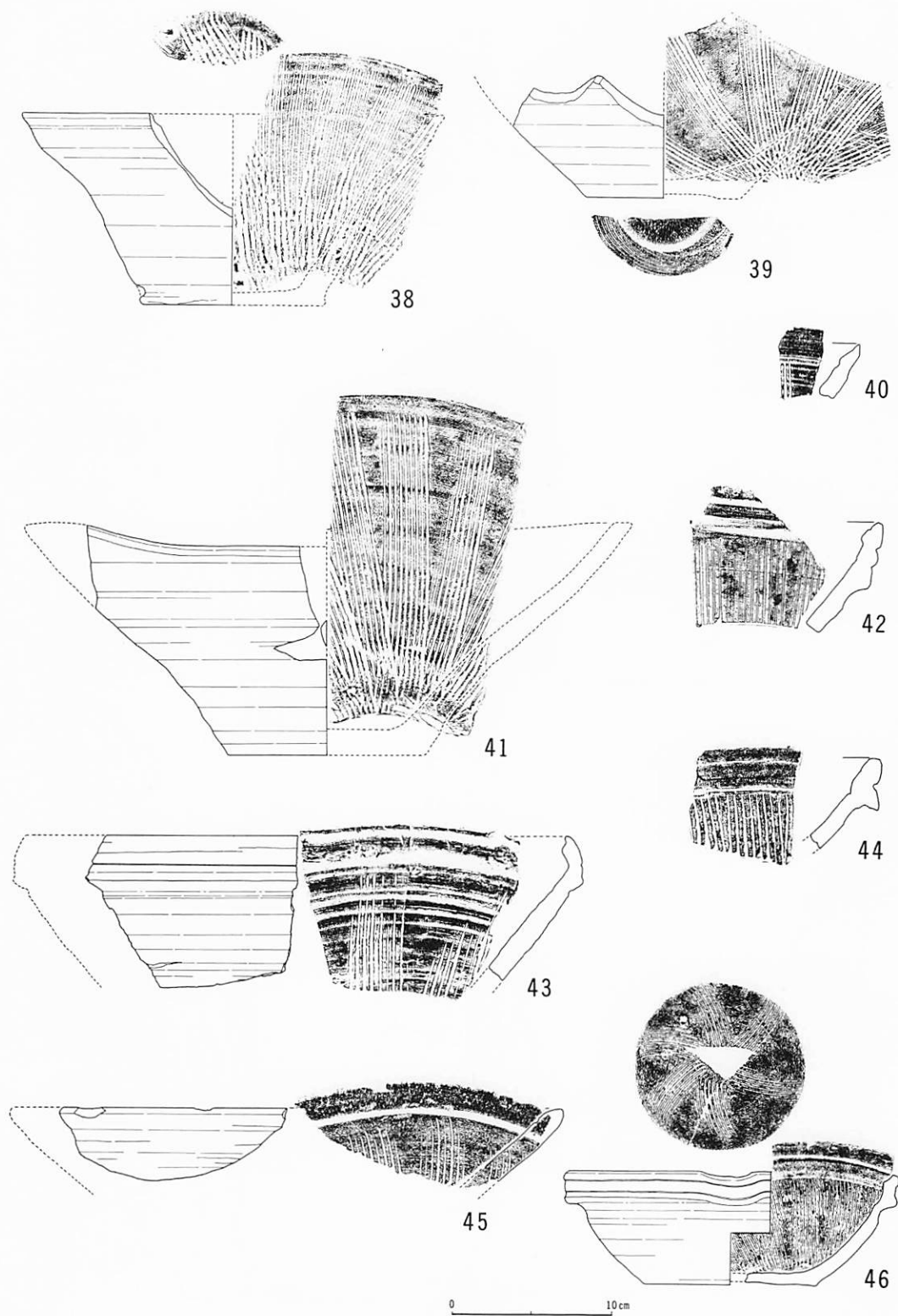
第10図 出土遺物 (3)



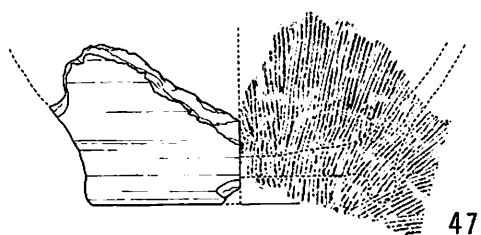
第11图 出土遺物 (4)



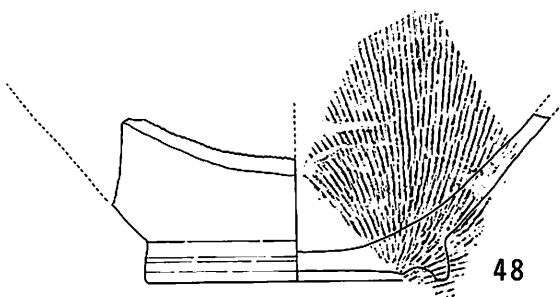
第12図 出土遺物 (5)



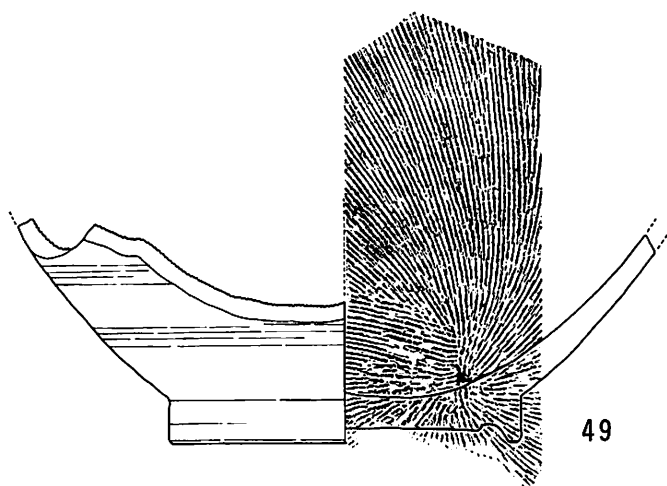
第13図 出土遺物 (6)



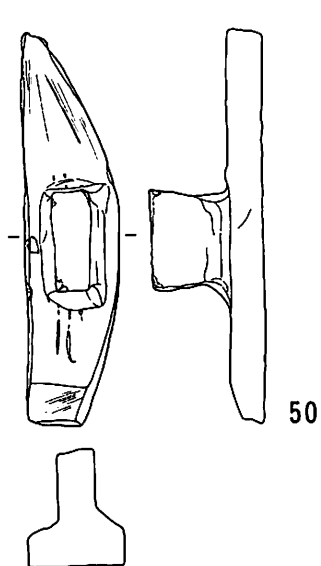
47



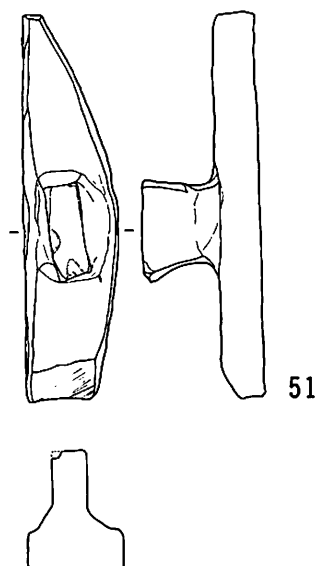
48



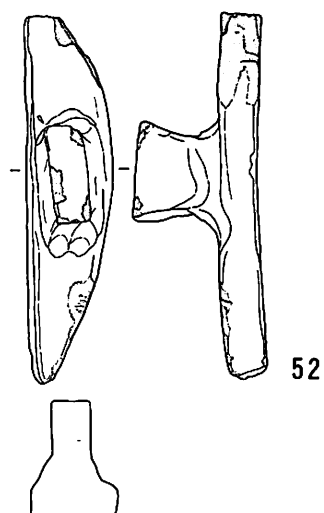
49



50



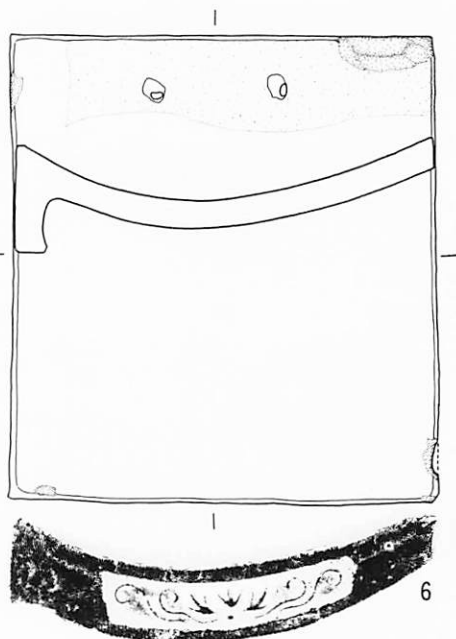
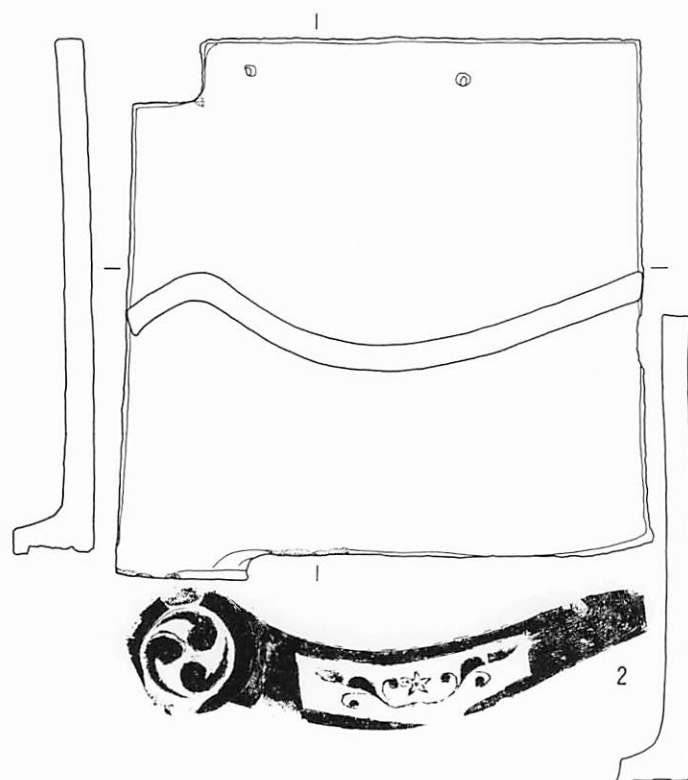
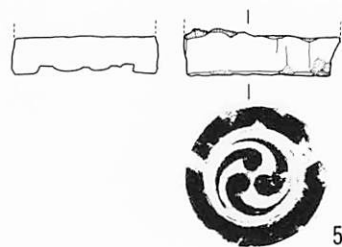
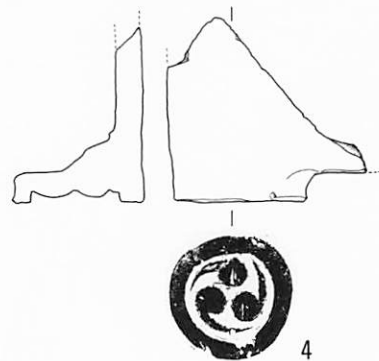
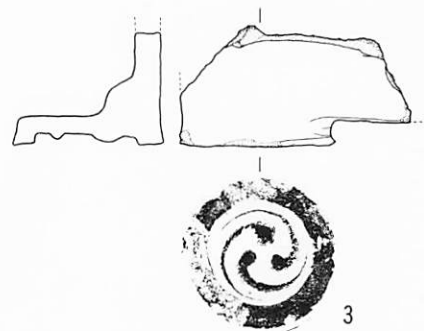
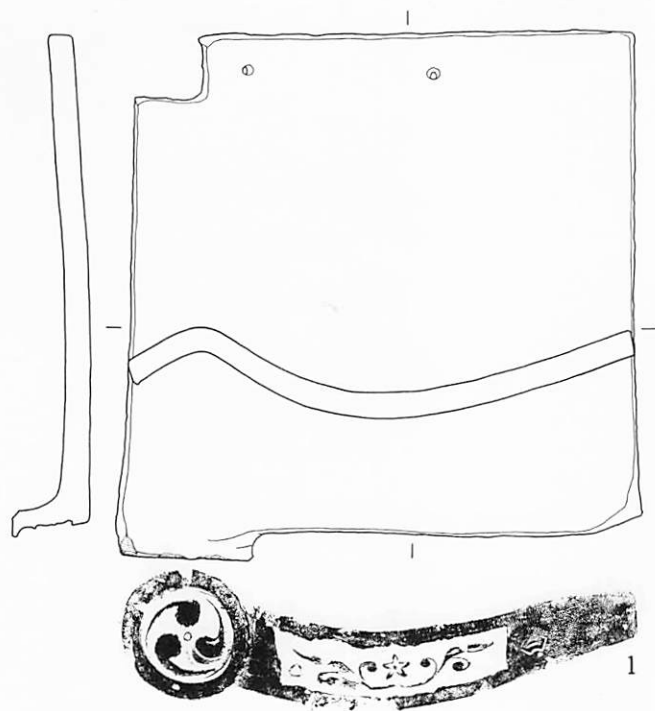
51



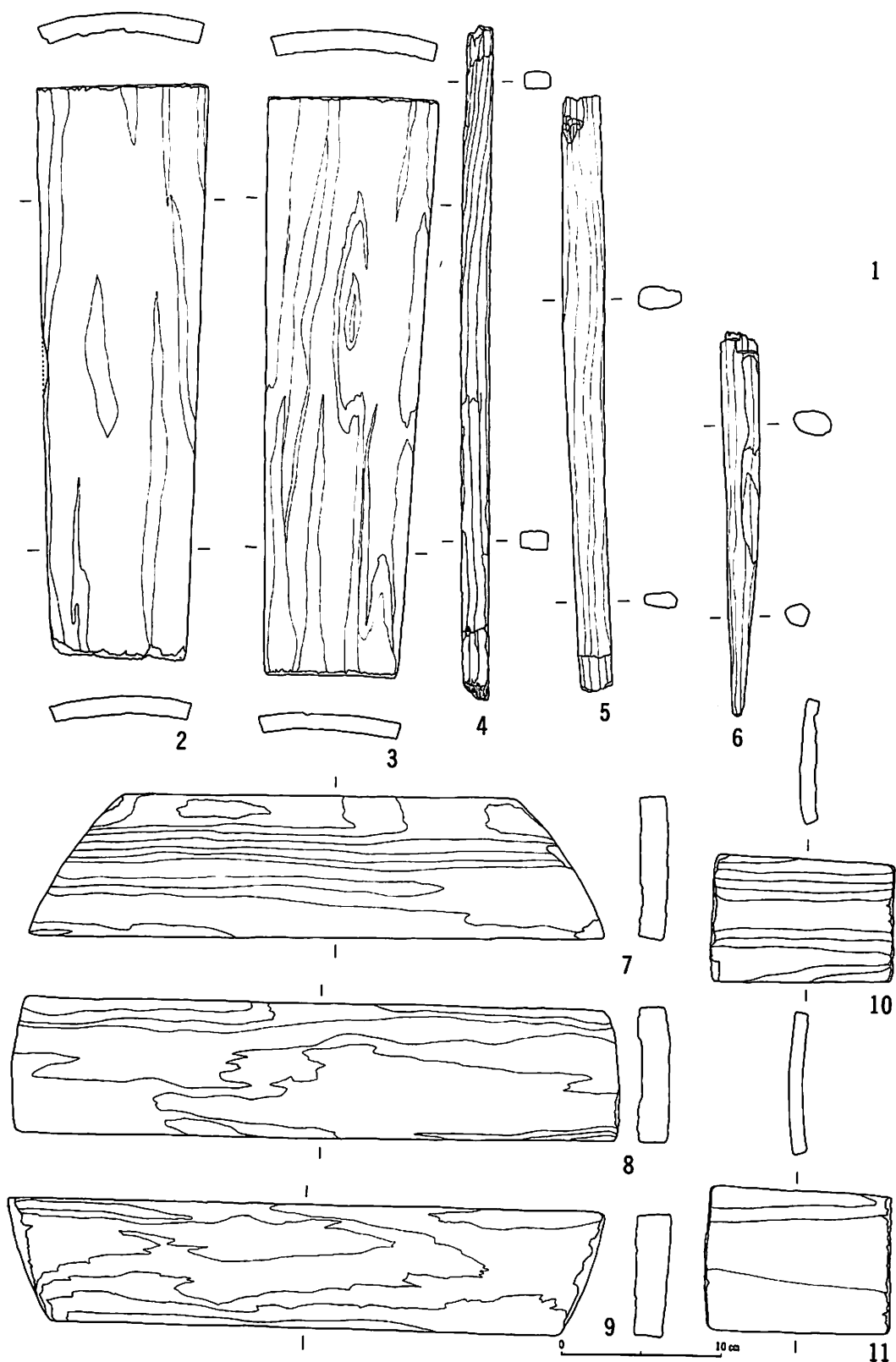
52

0 10cm

第14図 出土遺物 (7)



第15図 出土遺物 (8)



第17図 出土遺物 (10)

V ま と め

最後に、調査の成果と次年度以降に残る課題を記して、若干のまとめとしておきたい。内堀地区については、東西両側の石垣基礎部分をほぼ明らかにしたと考える。残るは北側部分であるが、ここは史跡内を通る道路の問題が解決しなければ調査は難しく、当面現状のままとし、機会があれば調査ということになろう。この部分の調査を待って、内堀の全容はほぼ明らかになる筈である。内堀西側の天端の問題は、最終的には北側部分の調査を待って決定しなければならないが、前述したように、現時点では、現在の地表面レベルまでは存在していたと考えておく。

本丸地域内は、期待に反してさしたる成果を上げていない。その主たる原因は、本丸地域内にあった旧松城小学校の存在が、かくも著しい土層攪乱をしたということに尽きるであろう。しかし救いとなるのは、小学校解体跡地は外囲りの土台石をそのまましてあり、内部には手をかけていない点である。建物敷地内は、敷地外に比べ若干（10cm内外）高く、少くとも明治33年の校舎新築以来攪乱を受けていない部分がかなり存在する。この部分を足がかりに調査を進めるならば、結果はある程度の期待は持てよう。更にまた、調査期間見学に訪れた60歳台以降の人々の語るところによれば、子供のころ、雨あがりの日などには、本丸御殿の建っていたような部分には土の色が変わって、くっきりとそれらしい跡が見えていたという。こうした現象は、石炭灰が敷散されている現在では観察のしようもないが、この話は大切にしなければなるまい。何故ならば、かなり確認しにくい遺構でも、雨あがりの翌日には土の乾燥状態によって遺構を確認することが可能となることを、我々はしばしば経験するからである。

また、旧福山館時代の生活面を現地表下40～50cmと押さえた成果は大きい。既に小学校解体時に一部テストピットで礎石と思われるものを同様の深さで確認しており、予想以上の範囲に生活面が残ると推定されるのである。例え福山城築城期の遺構があまり期待できなくとも、福山館期の遺構はかなり良好な状態で肥握できそうであり、今後の調査に委ねられる部分は大きい。

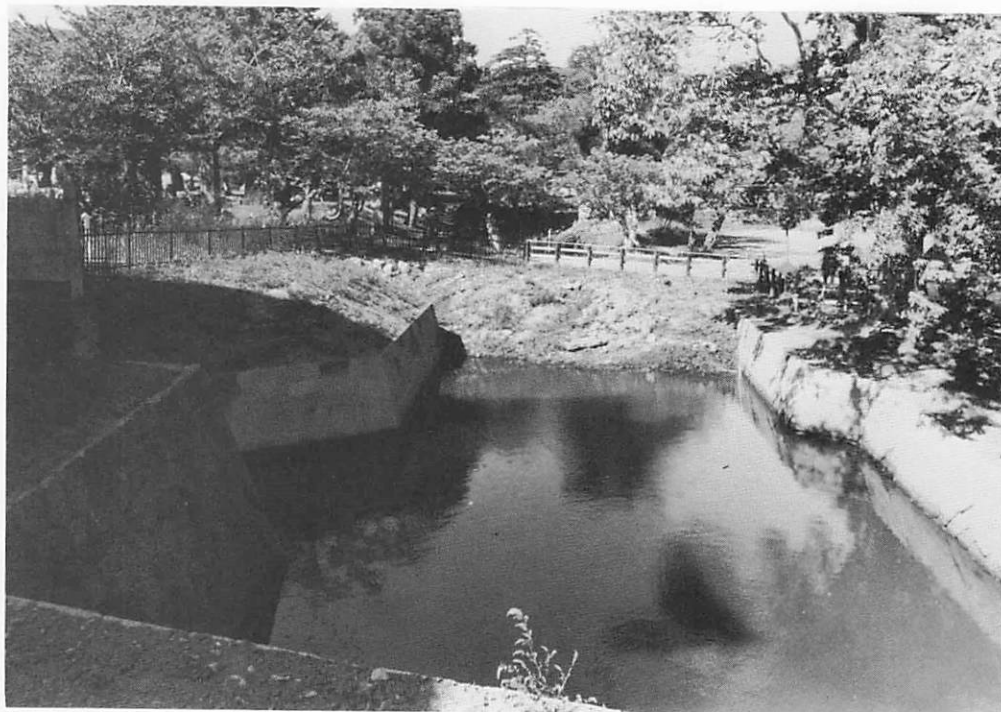
空壕は、おぼろげながら規模が把握できたにすぎない。他に比して深いだけに、機会があればより明確にできよう。なお、空壕の最下部の堆積から見て、埋めたてられた時期は松前の今の気候から推して、5月～9月頃までの間であろう。

参 考 文 献

- 内山 真澄 1980 「津軽陣屋跡」『寿都町文化財調査報告書Ⅱ』寿都町教育委員会
北海道埋蔵文化財センター編 1982～1984 『史跡松前藩戸切地陣屋跡』（昭和56年度～58年度）上磯町教育委員会
田淵 実夫 1975 『石垣』法政大学出版局
鳥羽 正雄 1971 『日本城郭辞典』
長沼 孝 編 1982 『史跡・白老仙台藩陣屋跡』白老町教育委員会

- 松崎水穂 他 1980 『史跡上之國勝山館跡』Ⅰ～Ⅴ 上ノ國町教育委員会
- 松谷 太 1984 『史跡福山城・史跡松前藩主松前家墓所』松前町教育委員会
- 松前町史編集室編 1974 『松前町史史料編第1巻』
- 〃 1984 『松前町史通説編第1巻上』
- 雄山閣 編 1974 『新訂陶磁用語辞典』

図版1 調査開始前の状況



内堀調査開始前の状態（南側より）



内堀調査開始前の状態（北側より）

図版 2 調査状況等



本丸調査状況



内堀調査状況



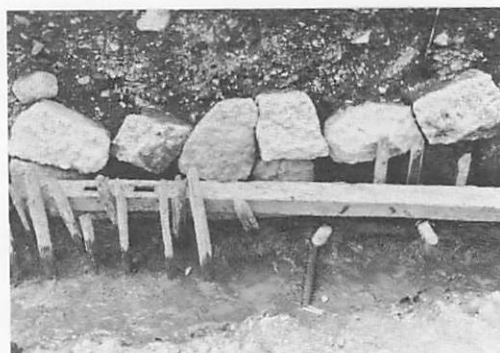
内堀調査状況



内堀西側杭検出状況



内堀東側桐木検出状況



内堀西側杭・角材検出状況

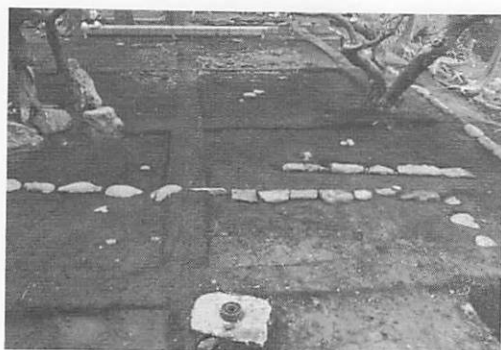


内堀西側石垣下部



内堀東側石垣・桐木検出状況

図版3 石列B検出状況等



石列B検出状況



Cトレンチ



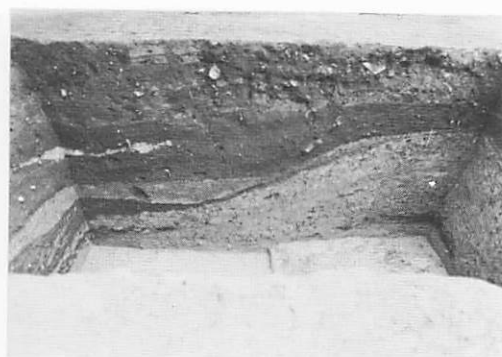
空壕(東側より)



空壕(西側より)



空壕(Bトレンチ東側土層)



空壕(Bトレンチ南側土層)



空壕内ピット(Cトレンチ)



空壕内ピット(Cトレンチ)

図版 4 内堀調査完了



内堀調査完了（南側より）

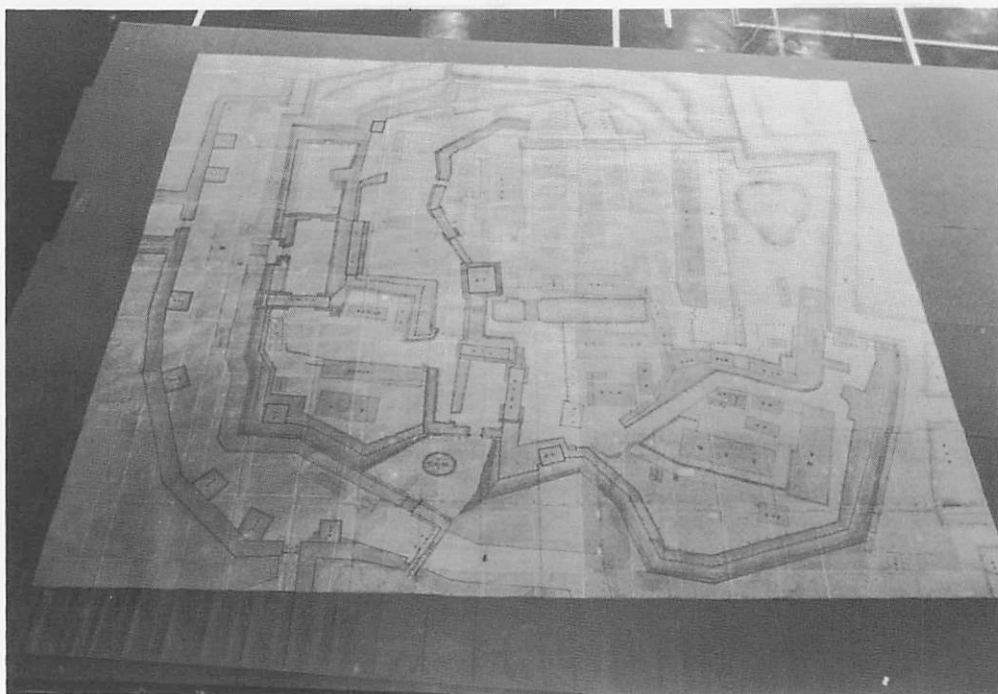


内堀調査完了（北側より）

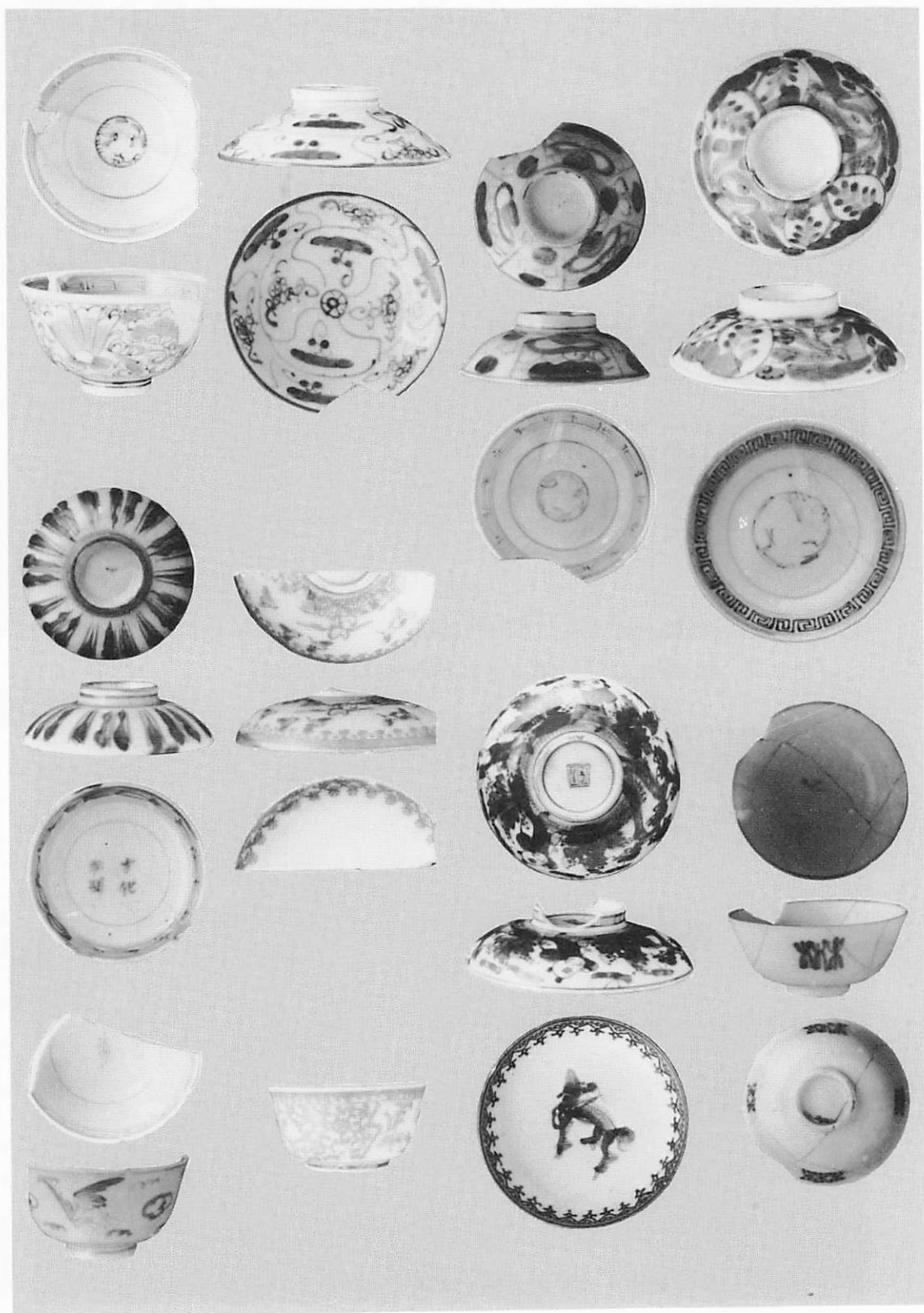
図版 5 御影奉置所等



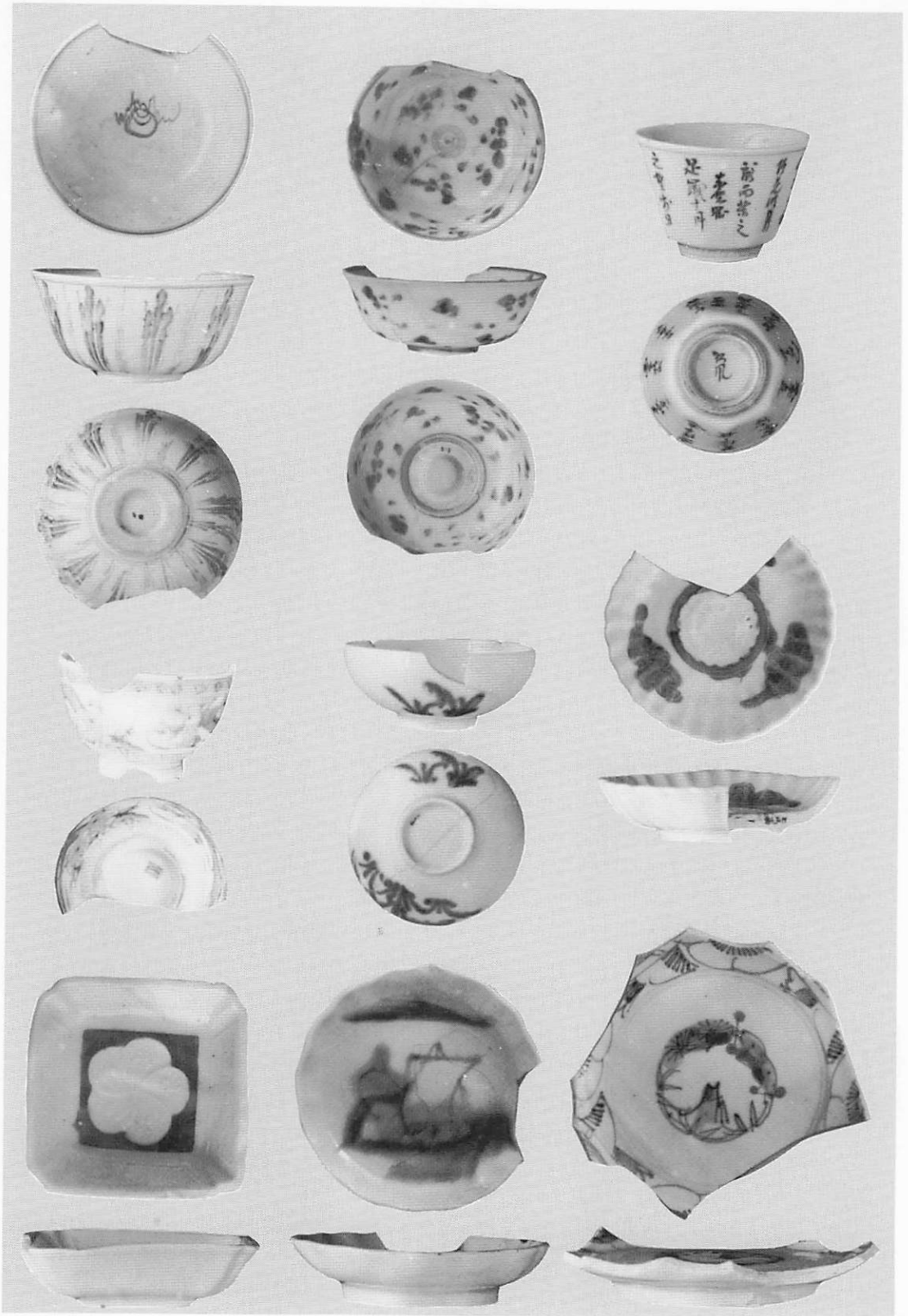
御影奉置所（大正7年刊，「渡島支庁管内町村誌」より複製）



松前神社所蔵 縄張図



图版 6 出土遗物 (1)



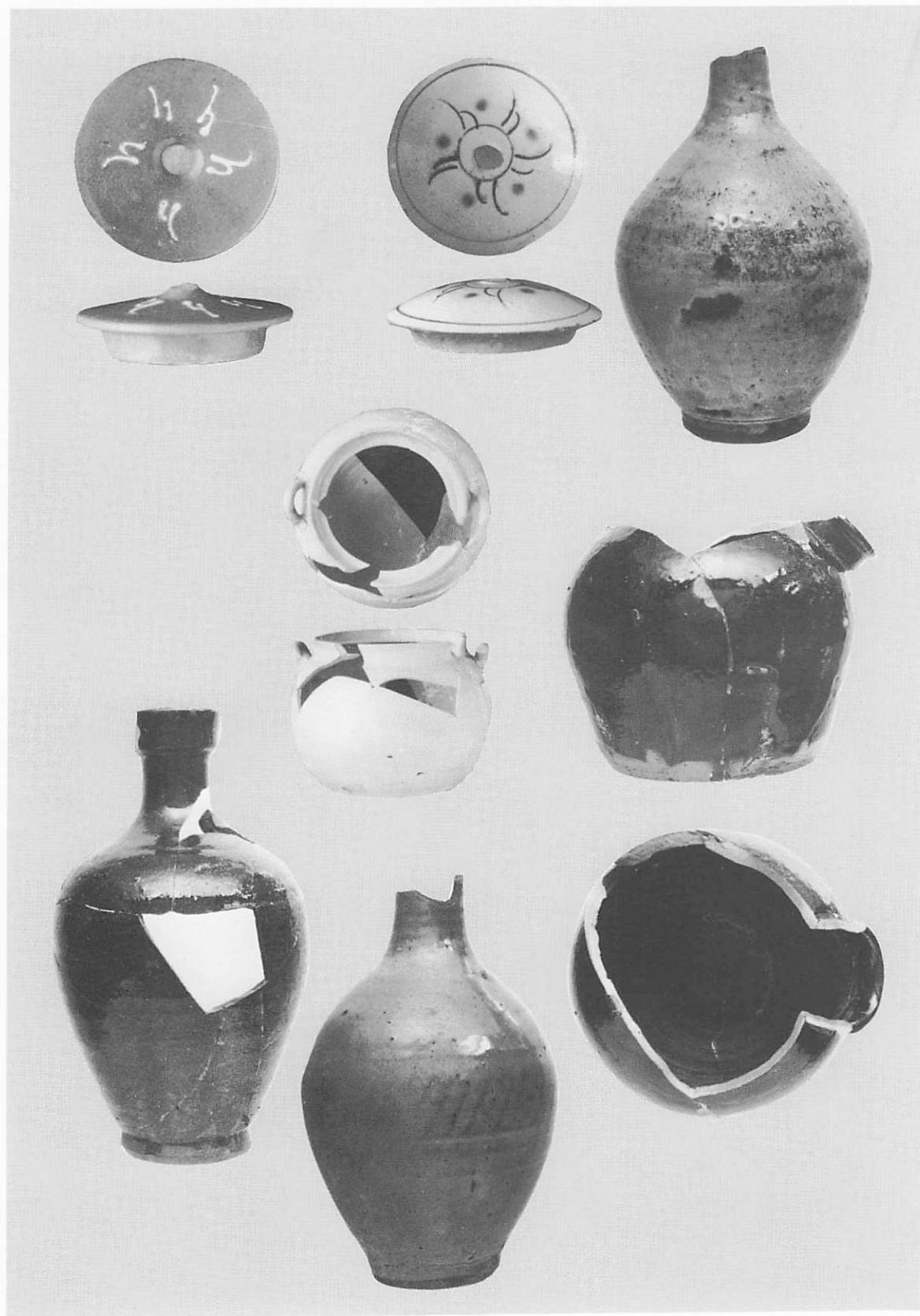
図版 7 出土遺物 (2)



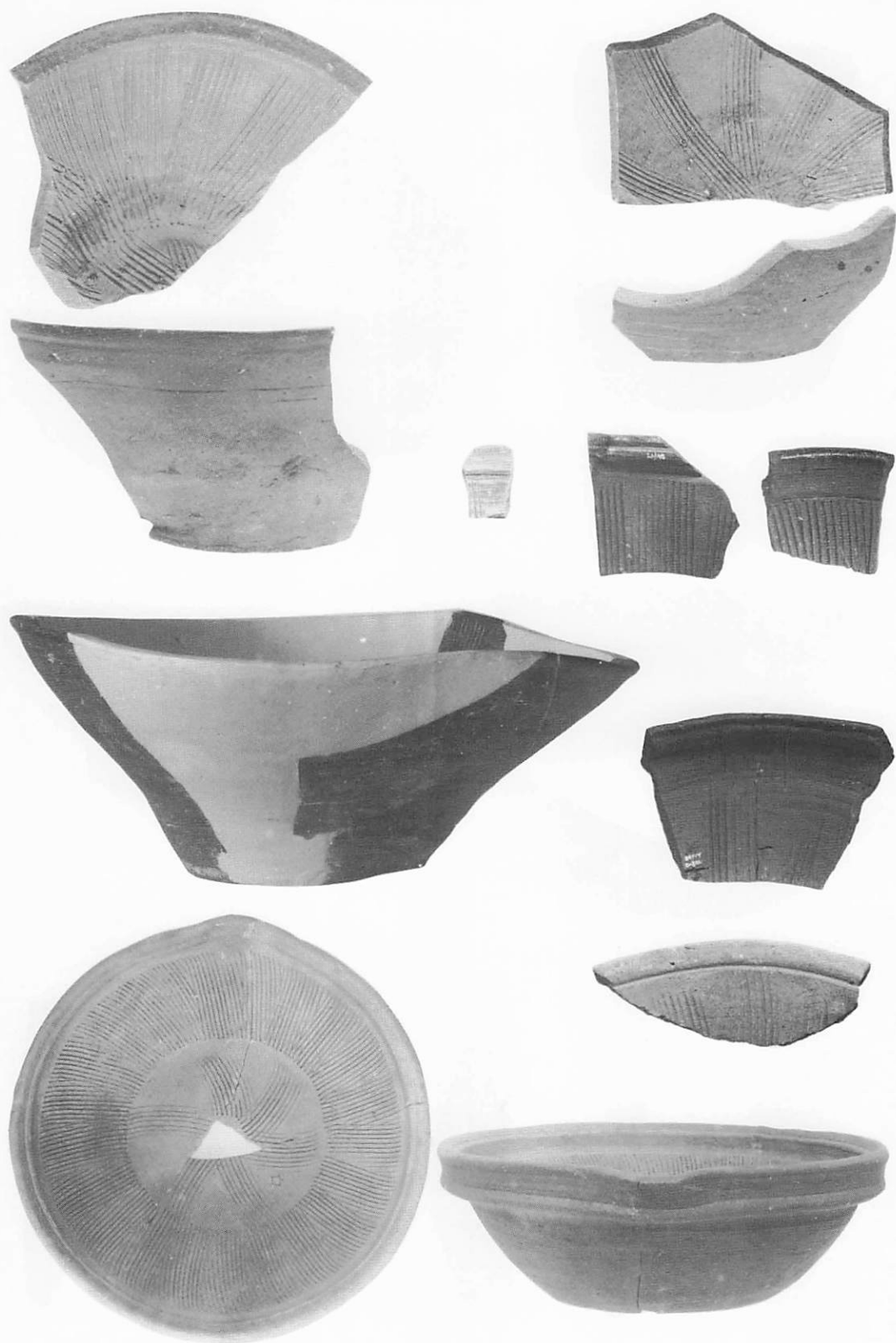
图版 8 出土遺物 (3)



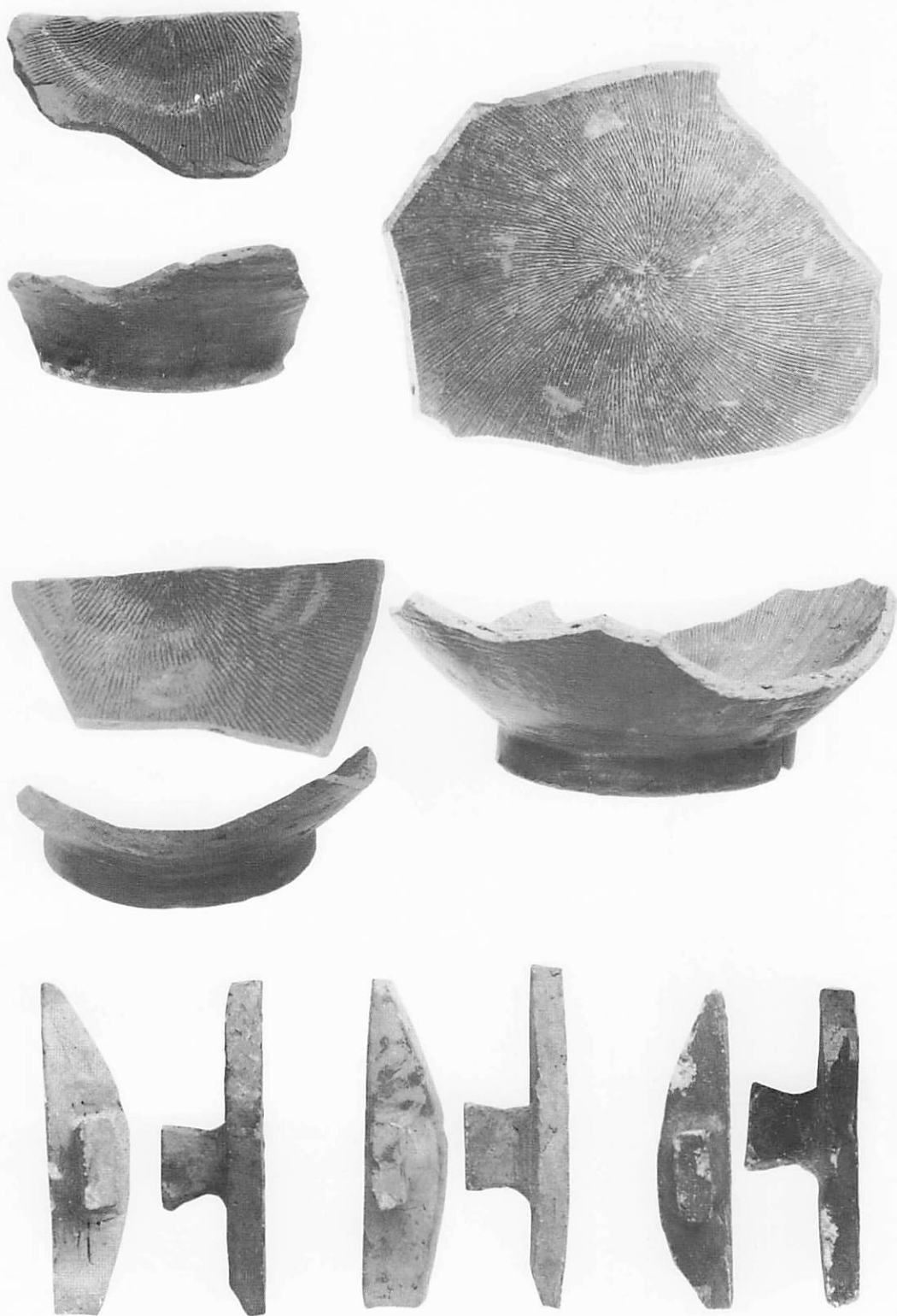
图版9 出土遺物 (4)



图版10 出土遺物 (5)



図版11 出土遺物 (6)



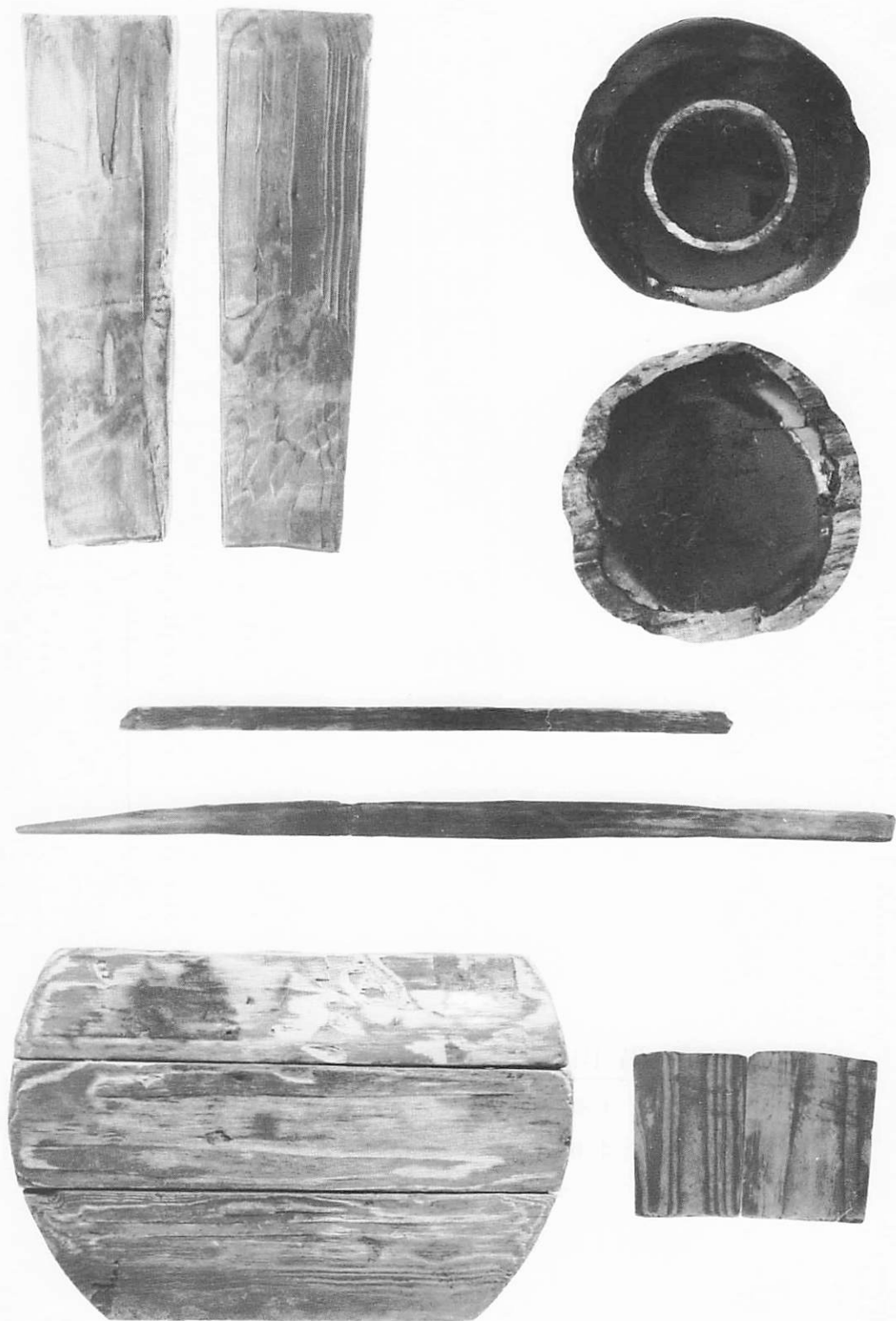
図版12 出土遺物 (7)



图版13 出土遗物 (8)



図版14 出土遺物 (9)



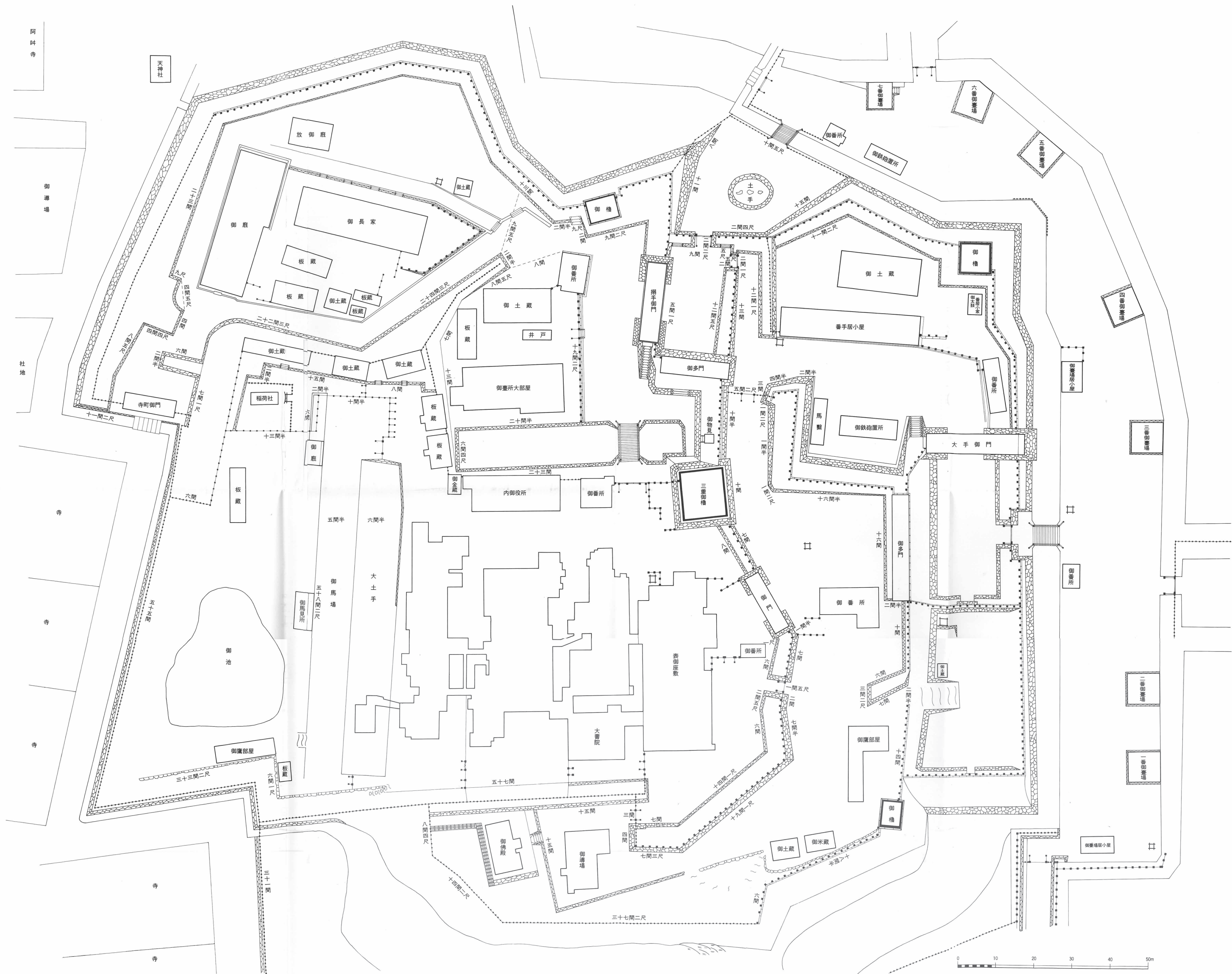
图版15 出土遗物 (10)

史跡 福山城 昭和59年度発掘調査概要報告

発行 1985年3月30日

発行者 北海道松前郡松前町教育委員会
松前町字神明30番地

印刷所 カジヤ印刷 松前町字福山



史跡福山城Ⅱ
昭和 59 年度 発掘調査概要報告
電子版

2025 年 2 月 20 日 第 1 刷

発行者 北海道松前町教育委員会

〒049-1594 北海道松前郡松前町字神明 30

TEL:0139-42-3060／FAX:0139-42-2211

WEB:<https://www.town.matsumae.hokkaido.jp/bunkazai/>

MAIL:bunkazai@town.matsumae.hokkaido.jp

底本：史跡福山城Ⅱ 昭和 59 年度 発掘調査概要報告
(1985 年 北海道松前町教育委員会発行)

この電子書籍は閲覧を目的としているため、不鮮明な図版や誤字が含まれる場合があります。必要に応じて、お近くの図書館等で底本をご利用ください。